
プラトニック・ラブ

綾瀬一美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラトニック・ラブ

【Nコード】

N0559W

【作者名】

綾瀬一美

【あらすじ】

2003年夏、御園学院高等部に転校してきた堀口 俊は、モデルとして活躍する藤木 雫に出会う。同性である雫に、とまどいながらも次第に惹かれていく俊。前世での恋人の生まれ変わりを探し続ける雫もまた、俊の存在が気にかかり……。*自ブログ「Dedicated to You」で連載している作品を転載しています。

第1話 丘の上の学院

「御園学院前」と書かれた停留所でバスを降り、堀口俊はポケットから地図を取り出した。本人はバス停のつもりで書いた「♀」マークから左上にむかって蛇行する線がのびている。線の先には長方形が描かれ、「ココ」と矢印があるばかりで、地図というより、いたずら描きだ。

地図をわたすからと言われてつい甘えてしまったのがまずかった。おつちよこちよいの姉、早織がまともな地図を書くわけがない。頼りにした自分が悪いのだと反省しつつ、俊は地図をポケットにしまい、左手の高台にむかつてのびる坂道を見上げ、大きく息を吸い込んだ。

目指す御園学院^{みその}へとむかってゆるやかに蛇行する坂道はやがて二つに分かれ、一方は左側に続く住宅街へと伸び、もう一方は急勾配の坂道となつてまっすぐに御園学院の校門へと続いている。

「マジっ…」

思わず漏らしたグチは、セミの鳴き声にかき消されてしまった。校門へと続く坂道が並木の葉影に覆われていなかったら、学院にたどりつけなかっただろう。

「マジ」などという言葉を口にした自分に、俊は我ながら驚いていた。家では、特に父親の前では絶対に口にしない言葉だ。

歌舞伎の名女形として名を馳せる父・中村扇之介は、跡取りの俊に対し、舞台の上だけでなく家の普段の生活でも女らしくふるまえ

と強要した。

舞台は舞台、実生活では自分は男だ、女のふりなんかできるかと反発して、「歌舞伎役者にはならない」と言い放ったとき、父は声を荒げて怒った。「歌舞伎役者にならないなら、この家にいる必要はない、出て行け！」と言われ、俊は家を出た。

入ったばかりの高校を辞め、寝泊りや食事に関らないという理由で、全寮制の御園学院に編入を決めた。入寮の手続きをするため、夏休みもあと一週間という時に、俊は荷物を抱えて坂をのぼった。

俊が幼いころに父と離婚した母は、俊が家を出たと知って喜んだ。

ピアニストの母、湯浅美弥子は、一緒に演奏旅行で世界中をまわろうと誘ってくれたが、歌舞伎漬けの毎日から解放された俊は、普通の高校生活を味わってみたいからと断った。

今まで味わうことのできなかった学生生活を満喫したいと言ったら、全寮制の学校に行くのがいいといって御園学院を紹介し、ささと編入手続きを済ませ、下手な地図を渡してくれたのが、二番目の姉、早織だ。早織はタレントとして映画やテレビで活躍している。地図が書かれた紙切れは、差し入れにもらっただろう菓子箱の包装紙だった。

一番上の姉、香織は、父と俊の関係を修復しようとしたが、香織のとりなしにも父は聞く耳もたなかった。香織は最後まで俊が家を出ることに反対したが、学院への編入が決まると、喜んで送りだしてくれた。

学院の敷地内に入るとようやく地面が平らになった。

校門を入つてすぐの右手には体育館が、左手にはグラウンドが広がり、手前では陸上部が、奥では野球部が練習に励んでいた。

坂道からまっすぐに伸びる並木道を道なりに進んでいくと、左右に向き合つた建物にたどりついた。

案内版によれば、左手が校舎、右手が寮だつた。コの字型をした校舎のくぼみ部分はグラウンドになっていて、サッカー部が練習試合を行つていた。時折あがる歓声を背に、俊は寮の建物へとむかつた。

寮へ向かう石畳の両脇には芝生が敷き詰められているばかりで、日陰を提供してくれる背の高い木は一本も植えられていなかった。容赦なく照りつける太陽のもと、噴き出す汗をぬぐいながら俊は寮を目指した。

第2話 影法師

遠目に寮の入り口と見たのは、中庭に抜けるアーチ型の通り抜けだった。芝の緑が美しい中庭の所々には奇妙な形をしたオブジェが置かれてあり、芝を寸断する石畳の道の先に、同じアーチ型の影が見えていた。アーチ型の先に何も見えないところからすると、そこが寮の入口なのだろう。

寮の入口とおぼしき場所まで、距離にして50メートルほどだが、俊の体力はすでに尽き、さえぎるものなく降り注ぐ太陽の光のもとへ歩きだしていく気力はわいてこなかった。

一休みしようと、俊は荷物を足元に置き、通り抜けの壁に体を預けた。たちまち、コンクリートの冷たさが火照った体に心地よくしみこんでいった。

あと5分休んだら…と何度も言い聞かせながら、どれくらいの間が経った頃だろう、石畳の上にゆらゆらとたちのぼる陽炎にまぎれて背の高い人影が立ち現れ、俊の方へと向かってきた。

人影は徐々に近づいてきたかと思うと、アーチの中へと入っていった。

光に覆われていた姿はたちまち影法師に変わった。影法師は、壁にもたれかかっている俊には目もくれず、足早に通り抜けようとしていた。

目線を泳がせ、俊は影法師の横顔を追った。

高い鼻筋、きりりと結んだ唇――ためらいのない線で描かれた横顔のどこにも隙がなく、完璧な造形のために非現実的でさえあり、感情をもたない冷たい人間なのではないかという印象を与えてしまふのだが、その実何やら熱いものを体の中に蓄えているようで、まったく前をむいた瞳の奥底から強い光が放たれている。

男は、真夏だというのに、長袖のＴシャツを着、袖をまくって、顔の繊細さに似合わない筋肉質な腕を披露している。V字に開いた胸元にはシルバーのアクセサリーが踊り、ジーンズの腰のあたりに、も銀色の光がまわりついていた。

教師にしては若すぎるが、かといって学生にもみえない大人びた横顔に、俊はどこか見覚えがあると感じていた。

「おい、どこかであつたか？」

アーチをくぐり抜けようとする影が足を止め、振り返った。その瞬間、相手とその後姿を追いかけていた俊の視線とがぶつかった。

俊は慌てて目をそらしたが、後ろ姿を追っていたとは相手にもわかってしまっていただろう。赤くなった顔がアーチの影になってみえていなければいいと思いながら、俊はうつむいて首を横にふった。

記憶をたどるようにその場にしばらく立ち尽くしていた影は、思い違いだったかと首を小さく傾げ、アーチを抜けて俊の視界から消えていった。後には、香水か何かの甘い香りだけが残っていた。

目があつたときの興奮がまだ体に残っている。激しく打ち続ける心臓を落ち着かせようと、俊は大きく息を吸い込んだ。とたんに、甘い残り香が胸いっぱいにひろがる。

動悸は数回深呼吸するうちにだんだんと収まっていった。

ようやくと俊は壁から体を起こし、寮に向かって再び歩き始めた。

石畳を反射して目を直撃する光は脳天に突き刺さり、坂を登り始めたところから感じていた頭痛がだんだんとひどくなっていた。入寮手続きを済ませたら部屋で休めるから…と、俊は重くなっていく体をひきずるようにして足を踏み出していった。

*

「すいませーん」

ようやくたどりついた寮の玄関先から中にむかって声をかけたものの、いくら待っても人が出てくる気配がない。玄関先には靴が何足か乱暴に脱ぎ捨てられている、誰もいないはずはなかった。

「すいませーん、誰かいますかー？」

やはり返事はなかった。俊は靴を脱ぎ、玄関をあがった。

正面にある階段を中心に、廊下が左右にのびていた。右の廊下を進んで角を曲がると、食堂に行き着いた。入り口から中をのぞきこんだが、誰もいない。来た道を引き返し、角を曲がったところで、俊は息をのんだ。

どこから現れたのか、血だらけの男が、ふらふらとした足取りで

廊下を歩いてきていた。制服の白いシャツが血で真っ赤に染まっている。

恐怖で体がこわばり、パチパチッと光の粒子が舞ったかと思うと、次の瞬間、目の前が真っ暗になり、俊は意識を失った。

第3話 ギリシャ彫刻とポツティチェルリの美女

御園学院高等部1年、増山達也は、学院きつての美貌の持ち主、高等部2年の松本 充と松元 累を口説き落とそうとやつきになっていた。鼻の頭に汗をかき、ずり落ちたメガネがかるうじて小鼻でひっかかっているが、それも気にならない熱の入れようである。

眉目秀麗とはまさにふたりのためにある表現だった。彫りの深い顔立ち、ゆるやかなウェーブがかかった艶めく黒髪の充は、エーゲ海の潮の香りが漂ってきそうな異国情緒をたたえている。フランス人の父親をもつ累のほうが一見してハーフとは区別がつかないさりとした顔つきで、抜けるように白い肌に明るい色の瞳をもち、少し赤味がかっているくらいで普段はあまり目立たない髪は、今は夏の午後の日差しを受けて明るい光を放ち、頭頂部に黄金の輪を戴いている。

優れているのは見た目ばかりではない。充は日本経済を牽引する松本財閥の御曹司にして、中等部・高等部あわせて1200名の生徒を束ねる生徒会長を務める。かたや累は世界に名だたるホテル王を父にもつ。松本 充と松元 累、同じマツモト姓のふたりを区別するため、充は下の名前で呼ばれ、累はマツゲンと呼ばれている。

外見も血筋もまるで少女マンガに出てくるようなふたりを主役にした映画を撮って発表したら、文化祭での映画研究会の成功は間違いない。充と累の美貌は学院外にも聞こえていて、毎年の文化祭では、彼らを一目見ようと、近所の学校はもちろん、遠くからもわざわざ女性たちが御園学院を訪れる。映画となったら、満員御礼は確実だ。

増山が中等部3年の時に設立した映画研究会、通称“映研”は今年初めての文化祭をむかえる。古今東西の映画を鑑賞、自分たちで映画も制作するという研究会だが、今のところ会員数は、会長の増山を含めて1名しかない。会員数を増やし、いずれは部活動にと計画している増山にとっては、2か月後に行われる文化祭で何としても華々しい結果を残さなくてはならない。

一度観た映画はタイトルやストーリーはもちろん、細かい場面や映画制作の裏話まで記憶している増山は、将来映画監督を目指していることもあって、“カントク”と呼ばれている。“カントク”こと増山の頭には、ギリシャ彫刻とボツティチェッリの描く美女が向き合う一場面が浮かんでいた。

「お願いします、ミツル先輩、マツゲン先輩！先輩たちが映画に出てくれたら、たくさんの人に僕の映画をみてもらえるんです。映画研究会の今後の発展のためにもっ……」

「お願いします」って言われてもなあ。映画っておもしろそうだとおもうんだが、俺と累とでどんな映画を撮るつもりなんだ？ストーリーはできているのか？」

増山は返事につまってしまった。ギリシャ彫刻とボツティチェッリの美女の美しい場面と構図が思い浮かんだだけで、ストーリーはまるで考えていなかった。

すると、それまで黙ってスケッチブックの上を水彩絵の具の筆を走らせていただけの累が

「BLでいいんじゃない？ボクらふたりのBLなら増山の撮ったどうしようもない素人映画でも観たい人はいるだろうし」

と、増山に助け舟を出した。

「ビーエルってなんだ？」

「Boys Love、つまり男同士の…イタっ！」

累が説明し終わる前に、枕が宙を飛び、累の顔を直撃した。その拍子に累は絵の具を全身に浴びてしまい、制服のシャツはちょうど累が使っていたクリームゾン色に染まってしまった。

「おい、どうしてくれるんだよ……」

「お前が変なこと言い出すからだ。どうせ水で落ちるだろ」

「シャワー浴びてくる。シャツはお前の貸しだからな」

そう言つと、累は寮の部屋に備えつけのクローゼットから充のシャツをひきちぎるように取り出し、充の文句をBGMに部屋を飛び出していった。

第4話 廊下を渡る影

廊下に飛び出したところで、あやうく累は人にぶつかりそうになった。夏休みも残り1週間、まだまだ戻ってくるつもりのない生徒たちのいない寮の廊下を足早に通り抜けていったのは、高等部1年の藤木 雫だった。

1年ほど前、藤木 雫は高等部に編入してきた。すでにモデルとして活躍していた雫は、仕事が忙しいのか、めったに学院には姿を現さず、累と同学年だったが、出席日数が足りずに留年している。

父親が会社を経営していたり、役員や重役をしているという家の子どもたちが多く、中等部からの知り合いがほとんどという学院で、自立して仕事をしている藤木 雫という転校生は浮いた存在だった。その美貌は生徒たちの注目の的だったが、そのクールな外見どおり、冷淡で無愛想な男で、たまに学院にやってきて同級生たちと目があっても、挨拶ひとつもしない。

今もまた、累にぶつかりそうになっておきながら、謝るところか、累の姿が目に入っていないような勢いで、廊下の先に消えていった。

学期中にはめったに学院に姿を見せない藤木が、夏休み中の寮に何の用があつたのかと、累は不思議におもった。自分の部屋に帰ってきたにしても、留年中の藤木の部屋は一つ下の階のはずだった。久しぶりに戻ってきた学院で、自分の部屋がある階を間違えたのかもしれない。累はふたたび静けさを取り戻した寮の廊下をひとり歩きはじめた。

生徒の気配の絶えた寮をひとり歩くのが累は好きだった。聞こえ

るのは自分の足音だけという環境だと、趣味の絵もはかどるというものだ。

夏休みの間だけでも一緒に過ごさないと父から二スでの休暇を誘われていたが、断った。愛人をつくって母と別れ、今はその愛人と再婚、子どもまでいる父の新しい家族と一緒にではとてもではないが楽しい休暇をすごせそうにもない。それに父は、累の絵の趣味を嫌っていた。自分が経営するホテルの部屋には絵を飾らせるのに、絵を描く行為は生産性がないといって否定するのである。

“人はパンのみで生きるものにあらず”——幼い頃に行かされた教会で聞かされた言葉を累は思い出す。人間は食べ物だけで生きているわけではないと、精神的充足を求める聖書の言葉だが、芸術を否定する累の父の考えは“人はパンのみで生きる”ということになる。つまらない男だ——累は廊下を軽く蹴り上げて父の顔を打ち消した。

日本に残って正解だった。同室の充も盆休み明け早々に寮に戻ってき、毎日朝から晩まで、経済関係の難しい本を読んでいる。本を読んでいる間の充は静かなもので、累の絵の邪魔をしない。充もまた、累の存在に気を散らせるわけでもなく、互いに好きなことをして夏休みの時間を過ごしていた。父や愛人、その子どもたちと一緒にいるより、1日中読書で口をきかない友人と過ごすほうがよほど楽しい夏休みだった。

「映画、か……」

退屈はしないですみそうだと、累は増山の顔を思い浮かべていた。小柄でぽっちゃりとした増山はメガネをかけ、年は累と1つしか

違わないが、10も年下の子どもにみえる。だが、映画に対する情熱は確かなもので、映画に関する部活がないと知ると映画研究会を自ら立ち上げるなど、映画監督になりたいという夢をまっすぐに見据えるしっかりした面もあった。

（のってみるかなー）

部屋に戻ったら、どんなストーリーでも出演OKの返事をしようと、累はステップを踏みながら階段を降り、廊下の角を曲がった先の大浴場を目指した。

廊下の先に、小さな人影があった。

昼のこの時間、寮に残っているのは、累と充、増山だけのはずだった。遠目にも小さすぎる影に、中等部の生徒が迷い込んだのかと思ひ、累は一声かけてやろうと近寄っていった。

みかけない顔のその人物は、男子校の御園学院には絶対いないはずの少女だった。少女の顔は真っ赤に染まり、息があがってしまっただかのような浅い呼吸を繰り返していた。累の顔をみるなり、少女は小さく叫んだかとおもうと気を失ってその場に倒れてしまった。

第5話 眠れる夏の少女

舎監の小島を呼びに増山を職員室へむかわせ、充と累は少女を談話室のソファ―に運んだ。

あまりのその身の軽さに、少女の体を抱きかかえた充は拍子抜けしてしまった。まるで紙風船を手に行っているかのような軽さの少女は、しかしひどい熱をもっていた。

「お前の知り合いか？」

「まさか。廊下に突っ立ってて、人の顔みるなりいきなり倒れてさ」

充は累のシャツの胸元を見た。

「お前のそのシャツのせいじゃないのか？」

「誰のせいだよ？」

充が枕を投げつけた拍子に、累はたまたま手にしていたクリムゾンの絵の具を被ってしまい、シャツには血を吐いたようにみえる染みがくつきりと浮き上がっていた。

「枕を投げてきたのはそっちだろ」

「お前が変なこと言うからだ」

「あんなの冗談に決まってるだろーが」

「冗談にしちゃ、たちが悪い」

「男同士で恋愛だなんて、考えただけでも気分が悪い」

「当然だ」

「特にミツ、オマエとはな」

「こっちこそ！」

部屋での諍いが再燃しそうなところに、増山と舎監の小島が駆け込んできた。

「おい、人が倒れたって?」

年は30を少し過ぎたぐらい、夏休み中でだらけているのか、無精ひげを生やして髪には寝グセが残っている。自身も御園学院出身の小島は、教師というよりは生徒たちのよき相談相手だった。累の血まみれなシャツを見て、小島はぎょつとした。

「あ、これ、絵の具です。倒れたのはあっち」

累の指し示した先には、ソファーに横たわる少女の姿があった。

「誰だ? マツゲン、お前の知り合いか?」

「知りません。勝手に寮に入り込んでいて、ボクをみるなり気絶したんです」

「その格好じゃあな。気分が悪くなってもしょうがないとこだな」

小島は素早く少女の体を見回した。一見したところでは、特に大きな怪我はしていないようで、出血もない。小島はほつと胸をなでおろし、少女の傍らにかがみこんで脈をとった。小島の手が余るほどの細い手首からは脈は感じとれなかったが、浅いとはいえ呼吸は確認できた。それにしても、少女の体は熱っぽかった。そばにいただけでも熱が伝わってくる。小島が直接触れた手首は太陽そのものを体に抱え込んでいるのではないかというほど熱かった。

「本当に、マツゲン先輩の知り合いじゃないんですか?」

増山の一言に、全員が累に視線をむけた。

「やだな、何？」

「お前なら夏休み中の寮に女を連れ込みかねない、という意味だ」

と充が解説すると、増山と小島がうんうんとうなづいてみせた。

「忘れたのか、ミツ。ボクの部屋にはミツだっているんだよ？ それなのにどうやって連れ込めるっていうのさ」

「空いている部屋ならいくらだってあるだろ？ なんてって夏休みなんだから！」

「ボクはプライベートな場所に彼女を連れてきたりしません」

と、言いながら、累は少女の顔をじっとみつめた。血の気の引いた白い額に、短い前髪がはりついている。三日月のように美しい形の眉が少し歪んでいるのは、体に熱がこもって苦しいからだろう。桃の薔のような小さな口をかすかに開けて、喘ぐような浅い呼吸をくりかえしている。

「知らないコだけど、どっかでみたことあるんだよね……」

ショートカットの、幼さの残る少女――遠くにぼんやりと浮かぶ記憶をみきわめようとするかのように累は目を細めてみせた。

「学院生の妹とか？」

「いや、違うな。学院生の姉妹ならボクが知らないはずはない」

増山の推測を打ち消し、累はさらに記憶をさぐっていた。

「…お前なら、道ですれ違っただけでも女だったら顔を覚えていそ
うだな……」

「うん、そうなんだ」

累の女グセの悪さを皮肉をこめてなじったつもりの充だったが、
残念ながら累にはその皮肉が通じていないようだった。

「はが”って言ったんだよ、この”」

「はが”？」

「倒れる少し前に、ボクにむかって“はが…”って」

「歯が痛いとか？」

と増山が返せば

「羽交い絞め？」

と累がふざけ

「なんで、羽交い絞め？」

と充がすかさずツツコミを入れた。

「ハガキ？」

「葉隠れ？」

「歯型？」

と、ふざけあっていると、笑い声に眠りを妨げられたかのように
少女は目をあけた。

第6話 少女 ≠

くぐもった人の声が途切れ途切れに聞こえていた。時折笑い声もまじる。人の話し声がするほうが寝入りやすい俊は、夢見心地で耳を傾けていた。

意識は目覚めていたが、まだ目を開けたくはなかった。意識を取り戻す少し前まで夢を、それも楽しい夢をみていたようで、胸が高鳴っている。内容ははっきりとは覚えていないが、続きが見られるものならと、俊は目を閉じたままで体を横たえていた。

背の高い男の影が、まぶたの裏にぼんやりと浮かびあがってきた。若い…20代、いや高校生くらいか。制服のようなものを着て、白い胸元が光っている。

“は…き…”

“はが…れ…”

シャツの胸元は血で真っ赤に染まっていた。

とっさに目を開けて、俊は血まみれの青年の映像を打ち消した。

タバコのおいが鼻をくすぐり、俊は顔をしかめた。開けたすぐ目の前に中年の男のひげ面があった。

「お、気がついたか」

男に支えられ、俊はソファアの上に体を起こした。辺りには、男のほかに数人の人間が俊を見守るようにして立っていた。その中に

は、血のついたシャツを着た学生の姿もあり、俊は思わずたじろいだ。

「気分はどう？」

明るい髪色のその学生は、血に染まったシャツを着てニッコリと笑った。男の俊でも思わずドキリとする色っぽい笑顔だった。

「『気分はどう？』じゃないだろうが。累、このコに謝れ。お前のそのシャツをみて気分を悪くしたんだろうから」

「あら？ ボクのせいなわけ？ もとはと言えば、ミツが投げた枕のせいで絵の具をかぶったんだろ？」

「お前がヘンなこと言わなければ、枕は投げなかった」

「じゃあ、カントクのせいだ。カントクがボクたちふたりの映画を撮りたいって言うから…」

「僕のせいなんですか？ 僕は何も言ってないじゃないですか。Bしがどうのって言い出したのはマツゲン先輩ですよ？」

マツゲン先輩と呼ばれた学生は、くるりと俊にむきなおり、

「倒れたの、ボクのせいじゃないよね？」

と、同意を求めるように人懐っこい笑顔をむけた。俊は思わず吹き出した。

「あの、僕、気分が悪かったただけで、驚いたとか恐かったとか、そういうんじゃないんです。ちよつと日射病っぽくなっただけで—」

「ちよつと…今、『ボク』って言った？」

マツゲン先輩にむかって「謝れ」と言った男が、俊の言葉をさえ

ぎった。

「はい、言いましたけど？」

「お前、男か？」

「は？」

全員の視線が俊の全身にふりそそがれた。口ほどに物を言う目が、男のはずはない、女だろうと言っている。

まただ、また女に間違えられたのだ。もともと小柄で華奢な体つきのはずは、幼い頃からよく女の子に間違えられた。

女形を演じるせいで、“女だ”とからかわれることもあった。父に厳しく仕込まれた女っぽい所作がどうしても抜けず、中学生になつてからは、からかわれるならまだしも、女に間違えられてか何か、男に襲われそうになったこともある。努力して男っぽい仕草を心がけて粗野にふるまっているつもりなのに、また女に間違えられたのかと思うと、怒りと恥ずかしさで俊の首筋が真っ赤になった。

「どこからどうみたって、男でっ、男だろっ！」

「男です」と言いかけて、俊は乱暴な調子の語尾に言い換えた。

「どうりで胸がないと思った」

マツゲン先輩が俊のＴシャツの胸元を覗きこみ、俊は思わず体を引いた。その仕草がまた女らしかったのか、その場にいた全員が笑いをかみ殺した表情を浮かべていたが、マツゲン先輩だけが遠慮なく声をたてて笑った。

意識していないと、つい女らしい動きになってしまう、俊はソファの上でわざとあぐらをかいてみせた。

「男には見えないよなあ……」

後に生徒会長だと知るミツル先輩こと松本 充がぼそりとつぶやいた。

第7話 暗雲

「それで、“男”のキミがうちの学院の寮に何の用があつたのさ？
まあ、うちは男子校だし、“男”のキミがいても別に“おかしく”
はないけどもね」

マツゲン先輩こと累は、“男”という単語を発するたびに俊の方
を見、語気をわざと強めてみせた。

「僕、転校生です。堀口俊って言います。“男”だから、男子校に
入る資格がありますよねっ！」

俊もまた、“男”という単語を強く発して、累に対抗した。

「入寮の手続きがあるからって言われて来たんですけど……」

それまでわざと組んでいたあぐらを解いて、俊はソファアの上に
正座した。

「あっ！」

俊の言葉を最後まで聞かないうちに、舎監の小島が短く高い声を
あげた。

「君か、女形の転校生って！」

小島の一言に、俊は目の前が暗くなる思いがしていた。

「女形って？」

増山が聞き返した。俊が意識を取り戻してからというもの、増山はメガネの奥からじっと俊の顔をみつめている。

「歌舞伎の舞台で女役をやる役者だよ」

と充が説明すると

「どこかで見たことあると思ったら、キミ、中村芳太郎！」

と累が叫んだ。

決定打だった。

自分が歌舞伎役者の家に生まれたこと、女形であることは、できたら知られたくはなかった。女形だと知れたら、男のくせに女の格好をしてと、からかわれる暗黒の日々が訪れてしまう。生まれ変わった気持ちで新たに始めようとする高校生活に、たちまち暗雲がちこめてきた。

「そうか、職員室で待っててもなかなか来ないと思ったら、寮に直接来てたのか！」

「職員室？」

「職員室のほうへ来てくれって言ってあったはずなんだが…」

「あ……………」

地図をともに描けないだけでなく、姉の早織は伝言も苦手なようだ。あとで文句のひとつでも言ってやらないと気がすまない。

「手続きはこっちじゃ出来ないんだけど…」

ぶつぶつ呟きながら、小島は寝グセの残る後頭部をかいていた。

「まあ、いいや。増山。堀口を部屋に案内してくれないか」

「先生、どの部屋ですか」

「藤木と同室だ」

空気がぴんと張り詰めた。増山も充もあきらかに“藤木”という名前に反応していた。

「藤木の部屋ねえ…」

意味深な累の言い方がひっかつた。

「藤木って…？」

「モデルの藤木 雫。知らない？ キミが来る少し前に寮で見かけたから、どこかですれ違ったかもよ」

モデルの、と聞いて俊は思い出した。早織が夢中になっているモデルが藤木 雫という名前だった。一人暮らしをしている早織の部屋は彼のポスターで埋め尽くされていた。アーチですれ違った横顔に見覚えがあると感じたのは、ポスターを目にしていたからか。

「藤木 雫…」

通りすぎていった時に残った甘い香りの記憶が鼻の奥をくすぐった。ちらつと見かけたただだが、ひとなつっこいというタイプではなさそうだ。同室になるというが、仲良くやっていけるだろうか、俊は不安にかられた。累が俊の耳元でささやいた一言がさらに俊の気持ちを不安にかりたてた。

「俊くん、戸締りはちゃんとしたほうがいいよ。ドアと窓と両方ね」

第8話 緑の窓

寒々しい部屋 ― 閉めきつた部屋に熱気がこもっているにもかかわらず、俊は背中にもひやりとしたものを感じずにはいらなかった。

御園学院では二人で一部屋を共有していると聞かされた。俊が編入してくるまでは藤木 雫がひとりで使っていたはずの部屋は、ベッドと机以外には何もなく、がらんとして人が生活しているぬくもりが感じられなかった。

誰も使っていない部屋へ通されたのかと思った俊は増山に確かめたが、増山は間違いなくこの部屋だと言った。そして、ドアと窓と両方の戸締りをしっかりするようにと、累と同じ忠告を言い残し、そそくさと自分の部屋へと戻って行ってしまった。

窓のすぐ外には、大きなケヤキの木があり、青々としげらせた葉を風にそよがせている。空気をいれかえようと、俊は窓を開けた。ケヤキの葉をわたって部屋に流れ込んでくる風は、若い香りがした。

窓にむかって机が2つ並べられ、ベッドも2つ並べられている。ひとつが藤木 雫のもので、もう一方が俊のベッドだが、どちらにも人に使われた形跡がない。

体には依然としてだるさが残っていた。荷物をほくのもそこそこに、俊はベッドの上に体を横たえた。開け放した窓から心地よい風が舞いこんで、火照った体をなでていく。

もう稽古をしなくても、何も言われない。だらしなく昼寝をして

いても怒鳴られない。好きな洋服を着、好きな音楽を好きな時に聴き、マンガだって読みたい時には読める。ゲームだってし放題だ。

歌舞伎役者だとか、女形だとか、そんなことはもう考えなくてもいいのだ。

女らしく振る舞う必要もない。ここでは、好きなことを好きなようにして、思うとおりの自分自身でいられる。

俊は未来に思いを馳せた。同世代の友人、だらだらと過ごす放課後、部活、文化祭などの学校行事……。

放課後はすぐに家に帰って、父から厳しい稽古をつけられた。舞台がある時には、まんぞくに学校に行けたためしなかった。授業も途中で抜け出さなければならぬ時は何度もあつたし、周りには大人ばかりがそろって、ころころとじゃれあう同じ年頃の子どもたちはいなかった。

歌舞伎の家に生まれたせいで、それまで手に入れられなかったものを、今はその手の中につかんでいる。

親から譲り受けたものでもない。家のものでも、名前についてくるものでもない。欲しいと願った自分が、生まれて初めて父親に逆らって、手にした未来だ。

望むものを手にしようとしている俊は、自分の進む未来に一点の曇りもみていなかった。

第9話 いつかの記憶

その日の朝、藤木 雫は夢をみた。

また例の夢をみるのかと、雫はゆったりした気持ちでかまえた。

両側に同じようなドアの立ち並ぶ廊下を歩いている。御園学院、高等部の寮の廊下だ。角を曲がって2つ目の部屋に入ると、部屋に入ると、目の前の窓に中等部の寮と紅葉の美しい桜並木がひろがる。夢の中の雫は、左手の小指にしていた指輪を外し、机の一番上の引き出しに入れた。丸い台座にバラをあしらったゴールドの指輪だった。

そこで目が覚めた。やけにはっきりとした夢だった。

物心ついた頃から、雫ははっきりした夢をよく見る。背景まできちんと描きこまれた絵のようにくっきりとし、ストーリー展開に矛盾がなかった。それが夢ではなく、記憶だと知ったのは、小学6年の時だった。

夢にみたストーリーをそのまま作文にし、夏休みの自由研究として提出した。受け取った教師に、雫は呼び出された。ストーリーが、古い映画のものに酷使しているというのだ。映画を観たのなら、ストーリーではなく感想文を書けと言われた。教師から教えられたその映画を、雫は観たことがなかった。しばらくしてテレビで放送されたその映画を観た時、奇妙な感覚にとらわれたのを雫は覚えている。ストーリーはもちろん夢でみたものと同じ、それどころか映像の構図までがまったく同じだったのだ。

中学にあがってからと同じことが続いた。夢をみる。ストーリーを、レンタルビデオ店の店員に話すと「それは…」と作品を紹介される。テレビのスクリーンには、夢とまったく変わらない映像がひらかった。

映画の夢だけではない。

何度も同じ場所の景色の夢を見る。夏の海、南国の鮮やかな花、外国の街角、校舎らしき建物、教室、駅……御園学院の最寄駅に偶然立ち寄った時、雫は夢と同じ景色に驚きを隠せなかった。駅前には、夢に出てきたレンタルビデオ店がある。テナントは変わっていても、ビルは同じ場所にあり、街全体のつくりと印象が夢と変わらない。

駅から御園学院までの道のりを歩き、校舎を遠目にした雫は確信した。

自分が見ているものは夢ではない、いつか見た記憶がよみがえっているのだと。

すでにモデルとしてデビューしていた雫は、プロダクション社長のコネを利用し、御園学院高等部に編入した。1年前のことだ。

おもった通り、夢にしばしば登場した学校らしき場所は御園学院だった。小高い丘の上に広大な敷地をもち、正門から校舎にむかって長い桜並木が続いている。野球場、校庭、中部部・高等部の校舎、学院生たちが寝泊りする寮……。目隠しされていても学院内を自由に歩けるほど、雫は細かなところまで夢でみて知っていた。

自分は確かにこの場所にいたことがある――

寮のざわめき、教室から眺める空、何もかも知っている――

第10話 夢が夢でなく

指輪を引き出しにしまう夢をみたその日、雫はモデルの仕事の合間に撮影スタジオを抜け出し、バイクを飛ばして御園学院へと急いだ。

葉陰もまばらな桜並木を足早に歩き、寮の建物を目指す。四角い建物の中央はアーチ型にくり抜かれ、くぐりぬけると中庭に出る。芝の緑が美しい中庭には、奇妙な形のオブジェが点在し、雫が夢でみて知っているものもあれば、知らないものもある。

夢が夢でないのだとしたら、それは誰かの記憶ではないのか。そして、それは自分の記憶ではない。藤木 雫としての記憶は、はっきりとしていて、偶然近くに立ち寄るまで御園学院を訪れたことはなかったと自身でわかっている。にもかかわらず、学院の隅々まで知り尽くしているというのは、自分の中にいる別の誰か、たとえば前世の記憶なのではないのか――

自分の部屋のある階を通り過ぎ、雫は1つ上の階を目指した。階段をあがりきった先の廊下に足を踏み出せば、たちまち夢と同じ光景が目の前に広がる。雫は廊下の先にある曲がり角を目指した。

寮のつくりはどこも似たようなものだが、雫は迷うことなく、角を曲がって2つ目の部屋にたどりついた。負ったかすり傷も夢と同じドアノブに、雫は手をかけた。

鍵はかかっている。不用心だと思いつつも、部屋の主のだらしのなさに感謝しつつ、雫は素早くドアノブをまわし、するりと部屋の中へと体をすべりこませた。

目の前の窓の外に、夢の景色が広がる。違うのは、桜並木が目覚めるような緑色の一群であるぐらいだ。

まっすぐに机にむかい、一番上の引き出しをあける。

CDが2、3枚とあとはゲームソフトがつまっている。雫は引き出しの中をあさった。

指輪はなかった。雫は引き出しを閉じた。

今度ばかりは夢と同じというわけにはいかないらしい。ただの夢だったのかと落胆し、部屋を出ようとした雫だったが、何をおもったか引き返し、再び引き出しに手をかけた。

そのまま、引き剥がすような勢いで、雫は引き出しそのものを机から引き抜いた。膝について引き出しの奥を覗きこむと、光るものがみえた。手をのばしてみると、丸い輪が薬指に触れた。指先に輪をひっかけ、落とさないように用心しながら腕を引き抜くと、それは指輪だった。

丸い台座に、御園学院の校章であるバラをあしらった文様が彫られている。

指輪をポケットにいれ、雫は急いで部屋を出た。

誰もいない廊下に、ドクドクとなる心臓の音が響き渡っていた。

間違いない、夢は前世の記憶だ。

雫はポケットをさぐって指輪を探しあて、強く握りしめた。金属の硬くて冷たい感触が手のひらにしみわたる。雫は今や、確固たる現実をその手に握りしめていた。

ナツミ ― 彼女も実在するのだ。そう思っただけで心臓がまた一段と高鳴った。

笑顔がまぶしいその少女は早い時期から雫の夢にあらわれていた。彼女の夢をみた日は1日中落ち着かなかった。彼女の笑顔をみたい、話がしたいと、夢に彼女があらわれてくれたらと、眠りにつくのが待ち遠しかった。

ナツミ ― 夢で雫はそう呼びかけていた。

それが彼女の名前だった。愛しい人の名前だ。

彼女に出会うために生まれ変わったのだ。ナツミに会いたい、どこにいいのか、何をしているのか。ナツミという名前しか知らない。

会えるだろうか……

会えるはずだ ―

前世の記憶を夢にみたせいか、アーチですれ違っただけの見知らぬ人物ですら、どこかで会ったことがあるような気がしていた……

第11話 創造への誘い

「映画研究会に入らないか」――

どのクラブに入ろうかと考えていた俊に真っ先に声をかけてきたのは増山だった。学期が始まるまで一週間、何のクラブに入ろうかと考えていた矢先のことだった。

映画研究会、通称“映研”の主な活動内容は、映画制作だった。

映画制作と聞いて、俊は興味をもった。

女優として芸能活動をしている姉の早織が出演する映画の撮影現場に、俊は何度か顔を出したことがある。同じ演じるのでも、舞台と映画、歌舞伎とはまったく違う現場に、俊は胸おどらせてセツトの間を歩きまわった。

伝統の型にのっとった歌舞伎の舞台とは異なり、映画の撮影現場では、役者と監督が意見を戦わせて新しい何かを生み出そうとする空気があった。フィルムに焼き付けたものが永遠に残るのだと思えば、監督も演技をする役者も緊張するのは当たり前で、わきあいあいとしていながら、常に緊張感のただよう現場の空気が心地よかった。

歌舞伎役者にはならないと宣言し、家を出た俊は、伝統という鎖から解き放たれて軽くなった身を思い切り動かしてみたかった。スポーツ系の部活でもしようかと考えていたが、と同時に、自由になった両手で何か物を創りだしてみたいともおもっていた。

映画の撮影現場は混沌としていた。空気中にはふつふつと沸き立つエネルギーが満ち、掬い取ったなら、たちまちぐにやりとした何かが手の中に生まれる。

増山はプロの映画監督ではない。

学生の撮る映画と、姉が出演する映画とでは天と地ほどの差はあるだろうが、増山の語り口にはプロの監督と同じか、それ以上の情熱があった。

増山となら、何か新しいものが作れるかもしれない。

「おもしろそう。入ってみようかな」

新しい環境で何かにチャレンジしたいという気持ちにも後押しされ、俊は入会する意思を伝えた。俊の返事を聞いた増山は、談話室のソファから飛びあがり、俊に抱きつかうとしたが、俊の顔をみるなり頬を赤く染めて出しかけた両手をひっこめてしまった。

どうせ、俊が女の子におもえて照れくさくなったとかそんなところなのだろう。むっとする気持ちを俊はぐっところえた。女扱いにいちいち腹をたてるのは男らしくない。

「でさ、さっそくだけど、映画を撮ってみようとおもっているんだけど、役者として出演してくれないかなあ」

増山は文化祭での計画を俊に打ち明けた。

増山自身が会長をつとめ、新たに俊をむかえた映画研究会の会員数はたったの2名、同好会としての活動は認められているものの、

予算の割り当てなどでいい思いをしない。部活動として認められるには最低4人の会員数が必要で、増山はこれまでも勧誘活動を行ってきたが、一向に会員数が増える気配がない。やはり派手な活動内容を発表して注目を浴びるしかない、増山は来るべき文化祭で、研究会制作の映画を発表しようと考えていた。

「充先輩とマツゲン先輩も、入会はしないけど、映画には出演するって言うてくれてるんだ。これ、脚本。急にインスピレーションがわいてきてさ、一気に書きあげたんだ」

増山から渡されたノートの表には

” 金曜日の放課後 ”

と大きくマジックで黒々と書かれていた。

表紙をめくってすぐのページに、登場人物の名前が書きつらねられていた。登場人物は「拓海」「信吾」「愛」の高校生3人。

ストーリーは、現在に生きる拓海、20年以上も昔に殺された愛と、犯人で愛と付き合っていた信吾の3人を中心に、ホラーともラブストーリーともつかない物語が展開する。

脚本をさらりと読み通した俊は、登場人物の名前が並んだページを再びめくった。充と累が出演するというのなら、2人の役は「拓海」「信吾」のどちらかではない。残ったひとりが俊の演じる役ということになる。

「…ねえ、もしかして、僕に女役をやってもらおうとか思ってる？」

俊はおそろおそろ増山にたずねた。歌舞伎の女形を演じていたとは、増山にはすでに知られている。

「やっってくれるんだろ？」

増山は満面に無邪気な笑みを浮かべていた。

「やだよ！ 女役だけは絶対にやらないっ！ 女役なら映画にも出ないし、入会の話もなしっ！」

第12話 君を説く

「それは困るよ！ 君のほかに愛役をできる人間はいないんだから！」

映画研究会に入会すると言った俊が一転して拒否、映画撮影にも参加しないと言い出したものだから、増山の顔からは血の気が引いてしまっていた。

「映画はリアリティーでしょ！ 女子高校生役なら、ホンモノの女の子に頼んでよっ！ なんて僕がわざわざ女装してまで女役をやらなくちゃいけないのさ！」

女装という言葉を口にするだけでも俊は背筋がぞつとした。

「女の子の知り合いなんて、いるもんか」

「その辺でナンパでもしてくればいいじゃんか。映画を撮ってるっていえば、ついてくるコはいるんじゃないの？」

「ナンパなんか、できないよ」

ナンパと聞いて首筋まで真っ赤にしているところを見ると、増山は女性と口をきくことすらできなさそうだ。

「とにかく、僕はやらない！」

「この話は君にインスパイアされて書いたんだし、愛役だって、君をイメージしたもののなんだよ」

「僕は男なの！ 女役やってたからって、勝手に女のイメージで脚本書くなよっ！」

「君でないとダメなんだよ！」

増山の叫びを背中に、俊は逃げるように談話室を後にした。

＊

だが、増山は俊をあきらめなかった。

三顧の礼とばかりに、増山は三日連続で俊の部屋を訪れては、主演スターの説得にあたった。

朝から晩まで、消灯時間を過ぎても俊の部屋にいりびたりになつたままの増山を、寮に戻ってきた生徒たちがあやしみはじめた。部屋にふたりきりでいる間、俊も増山も、ドアは開けたままにしていたが、廊下を通り過ぎる生徒たちは、「ドアぐらい閉めるよな」と野卑なセリフを残しては乱暴にドアを閉めていく。そのたびに、俊は顔を怒りに真っ赤にさせながらわざと大きくドアを開けてみせた。

「いちいち開けなくても。気にしなればいいんじゃないの？」

「マツゲン先輩は、他人事だからそんなことが言えるんですっ！」

「うん、まあ、他人事だけでもね」

累は俊の顔も見ずに、サンドイッチにかぶりついた。

増山が俊の説得にあたり始めて3日目のこの日、累は充を連れて俊の部屋をおとずれていた。その手にはランチ用の軽食と大量のスナック菓子やドリンクの入ったビニール袋を提げていて、ランチを取る時間も惜しんで俊を口説き落とそうという増山を援護しに来たのだと言った。

「俊くん、やってあげなよ。女の子の役なんて、得意中の得意ですよ」

「得意って何ですか」

俊は累にくっつかかった。

「舞台で女装してたじゃない」

「女装じゃないですっ！ 女形っていうのは、男が女装しているのではなくて、“女”というキャラクターを演じているんです。たとえばが悪いかもしれないけど、本物の犬とか猿とかを舞台上げずに人が演じるのと一緒に――」

「犬猿はわかるけど、“女”は人間なんだから、歌舞伎だって“ホンモノ”の女の人が演ったっていいわけでしょ。まあ、歌舞伎はもとと女性がやってたものだけだ」

累の言う通り、歌舞伎はもとと出雲の阿国という女性が始めた踊りが発展したものだ。初期のころには遊女が舞台にたつということもあったが、風紀を乱すという理由で禁止されてしまった。

「女性が舞台に立てなくなって、じゃあ、男が女に扮してっていうのが、女形の始まりだったわけ。若くてかわいい（俊くんみたいなね、と累は付け加えた）男の子が女を演じるのも、問題になっただけだ」

「いつときますけど、僕はノーマルですから」

若衆歌舞伎と呼ばれた少年たちによる歌舞伎は、衆道とよばれる少年愛を助長し、これまた風紀が乱れると禁止の憂き目にあっていく。その後は成人男子だけによる歌舞伎だけがゆるされ、今日に至るが、男が女を演じるというのはどこか倒錯した淫靡なイメージがあるらしく、歌舞伎をよく知りもしない人間に、同性愛者だとかゲ

イだとか、からかわれるならまだしもいじめられることさえあった。トラウマは、苔のように俊の心にはりついている。

「と・に・か・く、女役はやらないから」

「ねえ、俊くん、どうしてそんなに女役を嫌がるのかな？」

「誰が好きで女のふりしたがるんですか？」

「女装が好きな人もいるでしょ」

「ちやかさないでくださいっ！ 僕は普通の男の話をしてるんですっ！ まともな男だったら、女のふりなんて気持ち悪くてできませんよっ」

「ああ、わかった！」

累はぽんと手を叩いた。

「何がわかったんだ？」

充が答えをせがむ。

「俊くん、ゲイだと思われるのがイヤなんだ」

凶星だった。累にストレートに言われたものだから、俊は逆に戸惑ってしまった。

「お前、そうなのか？」

「ちがいますっ！ 人の話聞いてないですね、充センパイ！」

「ちがうんだったら、堂々としてればいいじゃないか」

充の言う通りなのだが、世間にはレッテルという一度はられてしまったら身動きのとれなくなるものがある。歌舞伎の世界に一時期、少年愛の要素があったというだけで、いまだに女形に関しては、倒

錯した性を疑う世間の目がある。

「僕は、その、よく誤解されるんです…。見た目も女の子っぽいし、女役やってたから、つい動作も女っぽくなるし。センパイたちだって、最初、僕のこと女だって思ったでしょ」

増山をはじめ、累と充はそろって、うんうんとうなずいていた。

「今だって、増山がボクを追い掛け回すから、ヘンな噂がたってるし…」

充も累も噂については知らないわけではないらしい。ヘンな噂と聞いても、ふたりは表情ひとつ変える様子もなかった。事情を知らない寮生から見れば、俊の行く先々を追いかけまわし、部屋にふたりきりで長い間話し込んでいるのは、友人以上の関係を疑われてもおかしくない行動としかみえなかった。

「要するに、俊くんは、自分がヘンタイに思われたり、ヘンタイの餌食になるのがイヤで、女役を引き受けたくないわけだから―」

累の言い方は気に入らなかったが、事実そうであることは間違いない。

第13話 男役の恋愛事情

「男役ならいいわけだ」

累にそう言われると、俊は

「まあ、そうですね」

としか答えられなかった。

映画制作にかける増山の情熱には、俊は心うたれていた。女役でなければどんな端役だって引き受けて、映画制作に協力したいところだった。

「カントク、脚本の書き直しだ」

「マツゲン先輩、そう言いますけど、僕、この話、気に入っているんです。どうしてもこの脚本で、堀口君を愛役にして映画を撮りたいんです。この話は、堀口君が寮に来た日の事にインスパイアされて書いた話だから、主役は堀口君でないといけないし、女役でないといけないんです」

俊は、初めて増山と出会った時を思い出していた。御園学院にやってきた初日、真夏の日ざしに気分を悪くして倒れた俊は、寮の談話室へと運ばれた。意識を取り戻した俊の顔を、食い入るように増山はみつめていて、俊はその視線がむずがゆかったのだが、あの時の増山は「金曜日の放課後」のストーリーをその頭の中で描いていたというわけだ。その後、俊を部屋へと案内するなり、そそくさと立ち去ったのは、頭に浮かんだストーリーを一刻も早く文字にして

しまいたかったからなのだろう。

増山が情熱をそそいだ作品を形にしてやりたいような氣に俊は一瞬かられたが、首をふってその思いをすぐに打ち消した。

女役を演じたとあつては、何を言われるかわかったものではない。女だとからかわれたかつての日々をよみがえらすまいと、俊は唇をかみしめた。

「カントク、そもそも映画を撮る目的は何？ 研究会の新メンバー集めのためだね？ 派手な映画を発表して注目を浴び、入会してもらう。でもさ、今の脚本のままだと、会員を増やすどころか、誰も観に来てくれないよ」

累は俊の机に置かれてあつた脚本を手にし、充にむかつて放り投げた。

「うちの文化祭には毎年、大勢の人が訪れる。その大半が女子高生を中心とする女性たちだ。映画を成功させたかったら、彼女たちをターゲットにした映画にしないと。さて、ミツ、ターゲットが女性として、カントクのその脚本の映画は成功すると思うかい？」

「うーん……」

脚本のノートをめくる充の眉間にはしわが刻まれていた。

「金曜日の放課後」――金曜日の放課後になると、決まって教室の窓際の席に姿を現す謎の美少女、愛。男子校には決しているはずのない少女が現実存在するものではないと知りながら、拓海は、自分だけに見え、話のできる愛に次第に惹かれていく。愛は、20年以上も前に、教室の窓から飛び降りて自殺していた。だが、愛は

自殺したのではなく、恋人、信吾に殺されたのだった。

金曜日の放課後になると、拓海の目の前では、信吾の愛殺人現場の光景がくりひろげられる。信吾に呼び出された愛、やがて教室に入ってくる信吾、信吾に窓から突き落とされる愛。くりかえされる惨劇を目にし続けるのに耐えられなくなった拓海は、愛に信吾の裏切りを告げ、過去を変えようとする。だが、信吾は拓海の父親であり、過去を変え、愛の変わりに信吾が窓から転落した瞬間、拓海もこの世から消え去る――

「ホラーなのか何なのか、はつきりしない内容だな。もっとターゲット層のニーズを考えないと」

「ニーズ？」

「若い女性に観てもらう映画にするには、恋愛要素をもっと強めないと。ホラーだが、ファンタジーだかの要素をけずって、いつそ恋愛もの、ラブストーリーとしてまとめたほうがいいと思うが」

充のアドバイスに、増山は納得しかねるといったふうには首をかしげていた。よほど元の脚本が気に入っているようだった。

「というわけで、恋愛要素は外せないから、ミツとボクと俊クンのBL三角関係の話に……」

「おい、今度は本物の血を浴びせるぞ」

充の語気には冗談めいたものがなかった。

「あの、ビーエルって何ですか？」

と俊が聞くと、累は

「Boys Loveの略。男同士の恋愛もの」

と、さわやかに、そして何ほどのものでもないようにさらりと言
つてのけた。

「男同士ってっ！ それじゃ前よりひどくなってるじゃないですか
っ！ 大体、僕が女役をイヤだって言ってるのは、そのケがあるん
だって誤解されるからで、男同士の恋愛ものの映画に出たりしたら、
それこそ、何言われるか」

「その“ケ”って、何のケ？ 髪の毛？」

累は、明るい色の前髪を指で梳いてみせた。

第14話 琥珀色の罌

「マツゲン先輩、わかっててふざけてますよね？」

「でもさ、俊くん、男役じゃないとダメなわけでしょ？」

「まともな男役でお願いしますっ！」

「まともな男は女を好きになるわけで。そうすると、ボクがミツのどちらかが女役をやらないといけないことになるねえ」

累も充も、端正な顔立ちをしている。彫りの深い充は女装させたら、それなりの美人にはなるだろうが、外国人のような凄みが強すぎてしまう。ハーフの累のほうが柔らかな輪郭の持ち主で、女役が似合いそうなのは累の方だろうか、俊は素早く見積もった。

「お前の女役を相手にするのはごめんだな」

「ボクは、俊くんさえ構わなかったら、女役でもいいけど」

「え？ほんとにいいんですか？」

増山の目はいぶかしげに累をみつめていたが、その芯は期待で輝いていた。俊はしかし、累の言葉を疑っていた。冗談なのか本気なのか、累の心のうちは笑顔の仮面に隠されてしまっている。

「いいけどさ、ボクが女装しても、ボクだってバレるよね。ボクはそれでもいいんだけど、一緒に映画に出ているミツや俊くんにはヘンな噂がたちそうだね。“映画の中だけのことじゃなくて、あいつら本当にデキてるんじゃないかねえの”なーんてね」

「……」

俊は累に返す言葉がなかった。

「そこいくと、俊くんは、ボクらが女の子に間違えたくらいだから、女装しても正体がバレないとおもうんだよね」

「もしバレたら？ ヘンタイ扱いですよ？ そうなったときの僕の高校生活3年間どう責任とってくれるんです？」

「ふうん…」

累は腕を組んで考えこむ仕草をしてみせたが、実際には何も考えていないのは、次の一言で明らかだった。

「バレたら、そうだな…そのときは、ミツの“彼女”ってことで、守ってもらえば？ 生徒会長の“彼女”なら、誰も手を出さないでしょ」

「それって、責任とってることになります？」

「なんで俺なんだ。言い出したのは累、お前なんだから、お前の“彼女”ってことにしろよ」

「えっと、だから、僕が言いたいのはですね、バレても、僕はまともなんだってちゃんとかばってくれるかってことで…」

俊が言い終わるか終わらないうちに、累が俊につめよった。

「要は、バレなければいいんだよね？」

琥珀色の瞳に迫られて、俊は返事に戸惑った。

「歌舞伎役者も役者なんだから、男だってバレない演技ぐらい、できるよね？」

気に障る言い方について、俊は

「できますよっ！」

と
言
っ
て
し
ま
っ
て
、
後
悔
し
た
。

第15話 入道雲

「堀口、遅いなあ」

一足先に撮影現場に足を運んでいた増山は、機材の準備をしながら、俊がやってくるはずの方向から目が離せないでいる。

日曜日だというのに早起きし、増山はロケ地を選んだ近所の公立高校へ、俊は女子高生になるべく、小島の知り合いのもとへとむかった。

予定では、女子高生となった俊は、小島の知り合いの女性と連れ立って陽北高校脇の坂道にやってくるはずで、増山の視線は自然と女性の二人連ればかりに向けられてしまっていた。

「女性は身支度に時間がかかるものだよ、カントク」

と累が言つと

「お前も、俺との待ち合わせにはいつも遅れるが、それも身支度のせいなのか？」

と充が累をからかった。

「まさか、やっぱり女役はイヤで逃げ出したとか」

機材をいじる増山の手が止まった。

充と累に脚本の変更を迫られた増山は、俊にインスピレーションを得て書いた元の脚本を、「拓海」「信吾」「愛」の高校生3人に

よるラブストーリーに書き直した。だが、女子高生役を引き受ける
と言った俊が、今度は「セリフをしゃべると男だつてバレるのでは」
と言い出した。俊の声にはまだ少し高さが残っていたが、それでも
若い女性の声というには無理がある。せっかく俊が女役を引き受け
てくれたというのに、またしても立ちふさがる難関に参つてしまつ
た増山に助け舟を出したのが、映画研究会の相談役をつとめている
小島だつた。

自分が映画好きなこともあつて、増山が映画研究会を設立した際
には頼まれもしないのに相談役を買つて出た小島は、映画はやめて
ミュージックビデオのような作品を撮つたらどうかと提案した。「
時間も5分ぐらいで、観るほうも作るほうも、ちょうどいいんじゃないか」という小島のアドバイスに従い、映画は急きよ、ミュージ
ックビデオに変更になつた。

演技をするよりはマシだと俊はしぶしながらも女役を引き受け
てくれたのだが、撮影現場に俊が姿を現さない限り、増山は不安を
ぬぐえない。

「なんだ、堀口のやつ、女役をイヤがつてんのか？」

「女装好きのヘンタイにおもわれて、これまたヘンタイに付け狙わ
れるのがイヤなんだそうですよ」

「おい、ふざけるなよ」

茶化す累をさえぎり、充がそれまでの経緯をかいつまんで小島に
説明した。

「女装なんて、どうつてことないだろ？ お前ら、後夜祭じゃ、女
装大会をやつてるじゃないか」

「まあ、そうですけど。堀口の場合はシャレにならないから、イヤ

なんじゃないですか」

充にそう言われても、どこかピンとこないようで、小島は寝ぼけた目をしばたかせるばかりだった。

「堀口に連絡してみますっ」

小島たちのやりとりで不安を募らせた増山は、機材の準備を途中で放り出し、ケータイに飛びついた。

第16話 リボンとネクタイの恋

鏡にうつる姿が刻一刻と変わっていくのを、俊は不思議な気持ちで見つめていた。

知っているはずの自分の姿が、見知らぬ誰かに変わっていく。歌舞伎の舞台では、おしろいを施し髪かつらをつけて、普段の生活での自分とはかけ離れた姿に変身するが、エクステンションをつけた長い髪の姿は、現実的だ。母や姉たちを彷彿させるその姿に、俊は血の濃さを感じずにはいられない。

制服のブラウスとスカートを身につけると、俊は俊ではなくなつた。

女子高生役のための制服は、小島の知り合いだという石川ゆかりという女性が高校時代に着ていたものを借りた。ゆかりは、小島が個人的に参加している自主映画制作団体、テアトルの団員で、借りたのは制服だけではない。急な撮影で機材をそろえている時間がなかったなので、撮影道具一切も、ゆかりを通してテアトルから借り受けた。

男としては小柄な俊だが、さらに小柄なゆかりの制服はサイズがあわず、ブラウスはどうにかなるものの、スカートの丈が短く、まるでミニスカートをはいっているようにみえる。

俊の扮装を手伝ったゆかりは、俊の女子高生姿のあまりのはまりっぷりに調子にのって、エクステンションをつけた俊の髪をポニテールに結ってしまった。

「高校生だったころね、昼休みとか放課後に、よく友だちの髪をいじってたの」と、ゆかりは高校時代を懐かしんだ。

俊はゆかりとは初対面なのに、昔からよく知っているように気があい、話が弾んだ。

「ルーズソックス、はくの？」と聞く俊に、ゆかりは笑って「私が高校生だった頃は、ルーズソックスなんてなかったの。ハイソックスだった。ルーズソックスって、今は流行ってないわよね」「そういうば、みないね」と、友だちと話している感覚だ。

のんびりした性格らしく、おっとりとした口調だが、甘えた感じがしないのは芯がしっかりした女性だからなのだろう。美人ではないが、親しみのわく可愛らしさのある女性で、もし同じクラスにいたら真っ先に声をかけ、その後、何十年にもわかって友だちでい続けただろう。童顔にボブの髪型は若々しく、20年近くも昔だと言う高校時代とあまり変わらないのではないかと俊は想像した。

ゆかりは高校時代を思い出したのか、俊の仕度を手伝いながら、話は尽きなかった。ゆかりの通っていた高校では、ハイソックスはくるぶしまで下ろすのがカワイイと思われていたこととか、リボンは高学年になるほど胸近くまで下げてよくて、ブラウスのボタンを外してリボンをつけるのは3年生だけに許された特権とか、まるで久しぶりにあった同級生と話をしているように、ゆかりはしゃべり続けた。

「うちの高校は共学だったんだけど、付き合っている彼がいるコは、リボンのかわりに彼の制服のネクタイをしていたの。御園学院の生徒のネクタイをしてたコもいたのよ」

「うちの学院の？」

「うん。私、陽北高校の出身なの。御園学院の近所の公立校」

それで、と俊は合点が入った。借り物の制服だが、どこか見知っているような気がしたのは、近所の高校生たちを目にしていたからだ。

「ゆかりさんは？ まさか小島のネクタイをしてたとか？」

「うん。小島くんには別に好きな人がいたわよ。私の友だちは、御園学院の生徒会長と付き合ってたけど。お似合いのふたりだったな。私たち4人でよく一緒に遊んでいたの。カップルの2人は2人きりになりたがっていたかもしれないんだけど」

映画好きの小島とその友人が、ゆかりの友人がバイトしていたレンタルビデオ店の常連だったことから親しくなっていたと、ゆかりは語った。小島との関係をもっと詳しく聞きたかった俊だったが、なぜかゆかりの口調が重くなってしまったので、それ以上、深いことは聞けなかった。

それきり、ゆかりは昔話をやめてしまい、俊は俊で、自主制作映画についてゆかりにあれこれと質問を浴びせかけ、増山から連絡が来るまで、ゆかりの実家でふたりは息をつく暇もないほどにしゃべり続けたのだった。

第17話 卒業アルバム

学院の図書館に足を踏み入れるなり、雫はまっすぐに卒業アルバムの並べられた書架へとむかった。

前世での記憶を取り戻しつつある雫だったが、自分が何者であったのかはいまひとつはっきりとしない。夢として現れる記憶には、学院の景色がひんぱんに登場することから、御園学院にいただろうとは推測できた。

学院生であつたのなら、卒業アルバムに何かしらの痕跡を残しているだろうと雫はふんだ。そう考えるきっかけとなつたのが、寮の中庭にある奇妙なオブジェ群だつた。前近代的な形の定まらないオブジェは卒業生たちから学園に寄贈されたもので、その足元に打ち込まれたプレートには寄贈された年が彫り込まれていた。

雫は、夢で見知っているオブジェと知らないオブジェの年代を確認した。知っているものは1980年のもので、知らないものは1990年以降に集中している。ということは、雫の前世は1990年以前に御園学院に在籍していた可能性が高い。17歳という自分の年齢を差し引いた年、1986年の卒業アルバムから雫は手に取り始めた。

卒業アルバムは、中等部・高等部あわせて6年間の学院生活を写真でまとめたアルバムと、文化祭や折々のイベントに寄せられた生徒たちによる回想文からなる文集とに分かれていた。写真は、中等部の入学式にはじまり、文化祭、体育祭、修学旅行、課外活動、クラブ活動での様子など、さまざまな場面を切り取ったものが並べられ、絵巻物のように鮮やかに学院生活を物語っている。それらの写

真に、雫の記憶と一致するものはなかった。

次に雫が手にしたアルバムは1985年のもので、そこから順に1年ずつ雫は年を下っていった。だが、時代が下れば下るほど、写真の御園学院は古びていき、記憶とのずれが生じてくる。1980年のアルバムを調べたところで、雫は今度は1990年へとむかつて時間をのぼっていくことにした。

1987年のアルバムをめくったとたん、雫の脳裏にひらめくものがあつた。桜の花びら舞う入学式、同級生たちとはしゃぎまわった修学旅行、映画に夢中で、友人と一緒になって自分たちで映画を作ろうとしてあの頃……。

雫は震える手でページをめくっていった。知っている顔が次々と浮かびあがって、アルバムの中から雫に声をかけてくる。その中には、高等部の寮の舎監をしている小島の若き学院生時代の姿もあった。初めて小島と出会ったときに懐かしさを感じたのは、かつて同級生だったからなのか。他の写真に小島の姿を追っていく雫は、とある写真を目にした瞬間、息が止まった。

その写真のキャプションには「放送部映像班、文化祭にむけて準備中」とあり、小島ともうひとり、今では珍しくもないが、当時出回り始めたばかりのビデオカメラを手にした学院生が写っていた。雫が目を奪われたのは小島でもなく、たびたび目にしてきた小島の友人らしき学院生でもなく、彼の隣でこぼれる笑顔の少女だった。

いつまでもむきあっていたい、そう思わせる笑顔の持ち主は、ナツミだった。それまで靄がかかっていたナツミの顔がはつきりと目の前にある。揺れるポニーテールに、粒そろいの白い歯、今にも動き出しそうなナツミを雫は抱きしめたかった。

周囲に人のいないのを確かめると、雫はナツミの写真のあるページを切り取った。日曜日の図書館には生徒の姿は雫のほかにない。それでも居心地が悪く、ページをポケットにしまうと、雫は急いでクラス集合写真のページを探した。ナツミがいるなら、自分もこのアルバムのどこかにいるはずだ。雫のおもったとおり、雫の前世とおもわれる生徒は小島と同じクラスの集合写真に写っていた。ただし、ひな壇ではなく、青空を切り抜いてひとりで笑っていた。

別枠で写真が掲載されているわけは、文集に寄せられた小島の文章で納得がいった。

その生徒、芳賀^{はが}敦^{あつし}は、高校2年の夏、旅先の外国で事件に遭い死亡していた。1986年、17年前、ちょうど雫が生まれた時期と重なる。芳賀と同じ放送部映像班に所属していた小島は芳賀の死に追悼文を寄せていた。混乱した文章からは、友人を若くして失った悔しさと悲しみが滲んでいた。

青空にぼつかりと浮かぶ雲のような写真を、雫はじつくりと眺めてみた。何かの写真を引き伸ばして使っているのか、やや粗さの残る写真ながらも、目鼻立ちが整っているとはつきりわかる。白い歯をみせて笑う彼は好青年にみえる。これがかつての自分なのかと、雫は不思議なおもいにとらわれた。芳賀 敦としてすごした御園学院、芳賀 敦として愛した少女……記憶にあちこち抜けがあるものの、ナツミへの思いだけは今も体に熱く残っている。

自分は生まれ変わった。ナツミに再び会ったためだ。彼女を探し出さなければ――

第18話 罪悪感

図書館を後にしようと席を立った雫の目に、人影がうつりこみ、雫はおもわず身を隠すように席に体を埋めた。ポケットにはちぎった卒業アルバムの1ページがたくしこまれている。それまでアルバムに夢中で人の声など聞こえなかったのが、今は話し声が風に乗って聞こえてくる。声は、開け放した窓から運ばれてきた。ページを破ったところを見られでもしたかと、おそろおそろ窓に近寄って、雫は話し声の主を確かめようとした。

図書館の脇は少し傾斜のある坂道になっている。学院自体が高台にあるため、図書館の建物も道路から数メートル上に位置し、雫の位置からは坂道を一番高いところにいる数人の男女の頭部しか見えなかった。彼らからも雫の姿は見えないだろう。ほっと胸をなでおろした雫の目は、ひとだかりに顔見知りを見つけた。

ひとりには、舎監の小島だった。目元に17歳当時の面影が残るものの、いまや無精ひげもかまわない中年男になったものと、雫はつるりとした自分の顎を撫でて感慨に耽った。芳賀 敦としての時間は断たれたままだが、時間は途切れずに小島の上を流れている。

もうひとりには、ナツミの親しい友人で、確かイシカワ…という名前だった。小島とは異なり、17年の歳月は彼女には寛大だったように、夢の記憶とあまり変わらない姿だった。

あとは、生徒会長の松本 充に、副会長の松元 累、映画好きでカントクというあだ名をいただいている増山と、御園学院の生徒たち顔顔を連ねている。そのなかに、雫の知らない顔があった。

ナツミと同じ制服を着たポニーテールの少女に、雫はナツミでは

ないかと目を疑った。だが、ナツミであるわけがない。ナツミであれば、少女のそばにいるイシカワと同じ年ごろのはずだ。少女は、14、5歳ぐらい、確かに知らない顔なのだが、どこかで見かけたことがあるような気がする。

ナツミではないかとおもった瞬間、雫の心臓が飛び跳ねた。思い違いだとわかった今でも、心臓はわずかながらに高鳴っている。ナツミ以外の女性に心動かされたのは初めてだった雫は、ほんの少しの罪悪感を味わって苦笑いを浮かべた。

第19話 ガードレール

女子高生に扮した俊が撮影現場に姿を現したとたん、それまで撮影の準備であわただしかった空気が水を打ったようにしんとなった。

女装姿をからかってやろうと待ち構えていた累は、どこからみても普通の女子高生、いや普通以上にカワイイ俊の姿に感心してしまい、言葉もない。

映画研究会の相談役をつとめる小島は、俊をまともに見ることもできず、視線をあさつての彼方へと向けていた。

「ヘンな目でみないでくれます?」

俊の変身ぶりにぼうっとなっている増山や充の視線をくすぐったく感じ、俊は制服のスカートの裾を引いて、露になっている膝頭を隠そうとした。

増山がミュージックビデオのロケ地を選んだ場所は、学院の近所にある公立高校、陽北高校の脇をとる坂道だった。増山が選んだ曲の歌詞に坂が出てくることから、坂道での撮影となったのだが、増山から撮影の段取りを聞かされ、坂道の高い場所に立った俊は青くなって震えた。

「大丈夫、俊くん?」

俊の異変にいちはやく気付いたのは累だった。

「ちょっと気分が…」

「また日射病か？」

充は腕をあげて、俊の顔への強い日差しをさえぎった。

「暑くはないんですけど……」

増山の指示では、充の演じる「拓海」と俊の「愛」とは、自転車に乗って坂道をかけ降りるということだったが、俊は腰が引けて自転車にすら乗れそうにない。

坂の勾配はきつukはないものの、距離がある。坂をくだりきったところはカーブになっていて、その先もゆるやかな坂が続いて住宅街へと吸い込まれている。坂の歩道と隣り合わせの車道とはガードレールで仕切られていて、時折、思い出したように車が走り去っていく。ゆるやかな坂とはいえ、自電車で降りていけば距離によって加速がつき、カーブを曲がりきれないのではないか、事故に遭うのではないか、そんな恐怖心が俊の足を地面に縛りつけていた。

「おい、堀口。どうしたんだよ、はやく降りてこいよー」

カメラをまわし始めた合図をおくっても、一向に坂を降りてこない俊たちに、増山はしびれを切らし、声をあげた。

「どうした、堀口？」

坂の下で撮影を見守っていた小島が息を切らしてあがってき、俊に声をかけた。

「ちょっと危ない気がするんです…。いかにも事故が起きそうな坂道だし」

「うーん……」

増山がどうしてもというので、しぶしぶ坂道での撮影を許可したものの、小島は初めから坂道での撮影に乗り気ではなかった。増山は気づいていなかったが、実際に坂道で事故が多発しているとは、ガードレールについた無数の傷が語っている。

「ねえ、小島くん。俊くんが怖がってるなら、やめましょう。だって、ここ……ねえ……」
「そうだな……」

小島とゆかりは顔をみあわせてうなずくと、増山を呼び戻した。

「増山、悪いがここでの撮影は中止だ」
「ええっ！ 先生、それはないですよっ」
「堀口の顔をみてから物を言え。あいつ、顔が真っ青じゃないか」

血の気のひいた俊の顔をみ、小島には、坂ならどこにでもある、学院の図書館脇の坂はどうだと言われ、増山はしぶしぶロケ地変更を納得した。

「実はね、ここ、私の友だちが事故に遭った場所なの……。学校の帰り道、私たち、ここの陽北高校に通ってたんだけど、奈津美は坂の下の方に帰る途中で、事故にあったの。あの事故があつてから、ガードレールがつけられたのよ」

*

その夜、俊はなかなか寝付けずにいた。

坂での撮影は、小島の提案を受けて、学院の図書館脇の坂に場所を移して行われた。自転車に乗っての撮影は、俊がいやがるので、アップのカットに切り変えられた。ところどころにほつれがありながらも、どうにか何か、形になるもの、形になろうとするものを生み出した興奮で頭の芯が熱かった。

それでも、ようやくとるところと眠りに落ちそうなところで、俊は叫び声をあげて目を覚ました。

よほどの大声だったようで、隣の部屋の生徒が壁を叩いて抗議した。

悪夢だったように覚えている。細かいところまでは覚えていないが、自転車に乗った少女が坂を降りていき、事故に遭うという夢だった。その坂道にガードレールはついていなかった。

第20話 熱に酔う

世の中を煌々と照らす光となれ、という学院の精神から「煌光祭」と名づけられた文化祭まであと10日余り、10月に入ったというのに、増山の編集作業は遅々として進まなかった。

撮影はすでに終了していたが、9月に入ってから週末を利用して撮影し直したシーンを含め、一度完成したものを頭から再生しては増山はうなり声をあげ、また編集作業に取り掛かるという繰り返しで、すでに4度目の編集作業を行っていた。

マウスとキーボードを器用に操りながらコンピュータの画面上で編集作業を行う増山に対し、小島は、「昔ながらの編集作業だったら、フィルムがずたずたになってるな」と、作業の遅さを皮肉ったが、当の増山は、作業にのめりこんで外野の声など耳に入っていなかった。

増山が編集作業にかかりきりになっている間、俊は上映会の準備に追われていた。映像の方は何としても完成させてもらうとして、まずは上映会を行う場所を確保しなければならない。

文化祭での映画研究会の成功を何よりも望んでいるのは増山で、いい作品を発表したいという思いから増山は寝る間も惜しんで編集作業にとりかかっている。増山のそばにいて誰よりも増山の情熱を知る俊は、その情熱に感染したように、雑事に体を動かし続けた。

映画研究会として最高の発表会場は最新設備の整った講堂だったが、部活動として認められていない研究会には、その軒先さえ貸してもらえそうにもない。仕方なく、教室でと俊は考えたが、すでに

他の部やクラスごとの催しもので教室の空きは埋まっていた。

「1時間だけでもいいんです、少しの間だけでも間借りさせてもらえませんか」

俊は他の部やクラスの責任者たちと場所について交渉を始めた。ほんの少しの時間、場所をあげわたしてもらえないだろうかと頼んだが、教室を空けたりまた準備したりの手間を考えてか、誰もがい顔をしなかった。

「あそこはどうだろう」

俊が困りきっていると、充が助け舟を出した。

今は使われなくなっている視聴覚室なら、古いとはいえ、スクリーンなどの設備も整っている、上映会場として使えないだろうか。

充に案内され、俊は旧視聴覚室を訪れた。

最新のAV機器を備えた講堂が完成するまで視聴覚室として使われていた教室は、広さは十分だったが、場所がよくなかった。

視聴覚室は一般の教室から離れた校舎の奥、半地下のような場所にあった。窓は山茶花の植え込みに覆われて、教室全体が薄暗い。光があまり差し込まないので映像を見るには適当な環境だが、文化祭という華やいだ雰囲気には欠ける。

「ちょっと、わかりにくい場所ですよ。来るまで迷いそうなの……」

「それなら、累に地図を描かせればいい」

チラシ作成を請け負ってくれた累に会場までの地図を描かせたらいいという充の提案に背中を押され、俊は旧視聴覚室を上映会場に

すると決めた。

文化祭実行委員会に教室の使用許可をもらい、俊はさっそく準備にとりかかった。窓を開け放ってかび臭い空気を一掃させ、床と窓だけでも掃除すると、旧視聴覚室は人を入れても恥ずかしくない教室に生まれ変わった。

パイプ椅子を並べてしまうと、いよいよ文化祭をむかえるのだという実感がわいてきた。

煌々祭は明日にと迫っていた。明日から3日間、大勢の人たちが研究会の発表作品を観にやってくるのだ。そう思うと、俊はぞくぞくするほどの興奮を感じずにはいられない。

興奮しているのは何も俊だけではない。学院中に熱っぽい浮ついた空気が漂って、誰しもが落ち着かない気持ちでいる。机と椅子の呪縛から解き放たれたエネルギーが、ある形を成そうとしている。それがどういふものとなるのかは、誰にもわからない。わからないからこそ、わくわくした気持ちがあるので、酔ってしまいそうな熱気に俊は心地よく体をあずけてしまっていた。

第21話 待ち人

映画研究会の上映会場となる旧視聴覚室に整然と並べられたパイプ椅子に腰掛けたまま、充と俊は黙ったまま、じつと教室の入口をみつめていた。

煌々祭当日のこの日、上映時間まで1時間あまりだというのに、廊下を通り過ぎる人影すらも目に入らない。

「観に来る人、いるかなあ」

「その心配なら必要ないな。むしろ、ここでも狭いくらいだ」

「狭い、ですか？」

「うーん…累が呼び込みをするからなあ…」

充は腕組みをして、上映会場の広さを心配していた。

パイプ椅子を並べた会場は、ざっと1000人は入りそうな広さがある。

研究会の発表の場として最高の場所をとという情熱で突っ走ってきた俊は、今さらながら広さが気になった。広い場所で観客がひとりもいなかったら、増山はかえってショックを受けるのではないか、そんな不安が俊の胸をよぎった。

「それより、俺が心配しているのは、上映時間までに作品が完成しているかどうか、なんだが」

「ですよね…」

俊が待ちわびているのは観客ではなく、増山だった。いよいよ上映会だというその日になっても、肝心の上映作品がまだ完成してい

なかった。コンピュータを使って編集作業ができるものだから、増山は上映時間ぎりぎりまで編集作業を続けて納得のいく作品を作るつもりでいるらしい。

「ごめんなさい、遅くなっ たわ」

増山の到着を心待ちにする俊たちのもとにやってきたのは、プロジェクターを抱えたゆかりだった。

「ケータイ鳴らしてくれば、駅までむかえにいったのに」

ゆかりの姿を目にするなり、充はすばやくそばに駆け寄り、プロジェクターを受け取った。充が教室の入口に求めている姿は、増山でも観客でもなく、ゆかりだったようだ。

「何とか間に合ったみたいね」

「肝心の上映作品は間に合うか、微妙ですけど」

「まさか、まだ編集してるの？」

「そうなんです…」

ゆかりでなくても呆れる。俊は教室の入り口に視線をやったが、増山がやってくる気配はまったくなかった。

「準備だけはしておいてあげましょうよ」

と、ゆかりが言うので、充と俊は、早速プロジェクターの設置にとりかかった。

第22話 思い出は未完のまま

撮影機材と編集機材は用意していたものの、いざ上映するとなったら上映する機材がないのに気がついたのは、文化祭の始まる数日前のことだった。増山は小島が用意していると思いこんでいたし、小島は増山が準備しているのだと思っていた。

プロジェクターがないと分かってから、小島は慌ててゆかりに連絡した。小島とゆかりが所属する自主映画制作団体・テアトルの上映会で使用しているプロジェクターを借り受ける約束を取り付け、どうにか映画を上映する手配は整った。

「監督さんって、編集にこだわっちゃうのね」

所属する団体・テアトルにも増山のような人間がいて、ゆかりはその人物を思い浮かべてでもいるかのように、口元をほころばせた。

「増山くん、小島くんに似ちゃったのかも」

「小島に？」

「充くん、先生を呼び捨てにしないの」

ゆかりにたしなめられ、充は苦笑いを浮かべた。

「小島くん、学生時代にお友だちと映画を撮ってたの。私も友だちと一緒に参加して短い作品を何本か撮影したけど、結局、完成しなかったのよね」

「小島が編集にこだわって？」

「充くん！」

「はい、呼び捨て！」

ゆかりにしかられるとわかっていながら、充はわざと小島を呼び捨てにしていた。

「小島の高校時代からの知り合いなら、付き合い長いですね」

充の呼び捨てを、ゆかりはもう注意しなかった。

「そうね。高校卒業して、短大に入ると同じぐらいの時期にテアトルに入ったから……長いわよね。結婚して苗字が変わったんだけど、小島くんはいまだに私のことを“石川”って旧姓で呼ぶのよね」
「え？ ゆかりさん、結婚しているの？」

ゆかりの思わぬ告白に驚いたのは俊だった。高校時代には小島に別に好きな人がいたらしいとゆかりから聞いていたが、それは過去のことで、今はゆかりと小島は恋人同士なのだと俊は勝手に思い込んでいた。恋人に頼まれたから、研究会の面倒をいろいろとみたり協力してくれたりするのだと思っていた。ゆかりと小島がふたりで話していると、趣味が同じ友人同士というよりは、恋人同士のような親密な様子だった。

「指輪してない」

充は、プロジェクターの高さを調節しているゆかりの左手を取り、しげしげと眺めていた。ゆかりは充の手をそっと払いのけ、

「普段はしてないの」

「浮気、できるね」

「しないわよ。大人をからかわないで」

高さの調節を続けた。

「旦那さんは？　どんな人？　どこで知り合ったの？　テアトルの人だったりするの？」

「堀口……」

矢継ぎ早に質問を浴びせかける俊を、充がさえぎった。不機嫌な顔つきで、これ以上ゆかりの私生活をきくなと目配せしてみせたが、俊にはその意味が通じていなかった。

「大学のときの同級生。映画は観る専門の普通の人よ」

ゆかりは、スクリーンのちょうど中央に映像がくるよう、プロジェクターの傾きを上にしたり下にしたたり、微調整を何度も繰り返していた。

「んと、ほんととは焦点も調節したいんだけど、肝心の映像がまだできてないのよね……」

スクリーンの中央部はそだけ判を押されたようにひとときわ明るかったが、四角くくり抜かれた部分には何も写しだされていなかった。

「いいわ、テアトルのフィルムを持ってきてあるから、それで調節してみましょ」

というと、ゆかりは手際よくセッティングし、映像がくつきりと映し出されるかどうか、スクリーンに顔を向けたまま、手だけを器用に動かしていた。

「慣れますね…」

ゆかりの手元を見るだけで、
充には手伝えることは何もなかった。

第23話 少女たちの波

「すいませーん。映画研究会の上映会って、ここですよね？」

普段の学院では耳にすることのないオクターブ高い声がした方を振り向くと、数人の女子高生たちが入り口で、中へ入ろうかどうか、ためらっていた。教室には俊たち3人のほか、誰もいなかった。

「そう、ここであつてるよ。もうすぐ始まるから、入って、入って」

累の声がしたかと思うと、累の後に続いて少女たちが教室へどつとなだれこんで、教室中が甘ったるい香りに包まれた。つい数分前までは、ゆかりが紅一点だったのに、累が連れてきた観客たちは少女ばかりで、女子高にまぎれこんだような男ふたり、俊と充は居心地の悪さを感じずにはいられなかった。

累は彼女たちひとりひとりを席に案内し、椅子を少し引いての紳士ぶりを発揮していた。

モデル顔負けの累にスマートにエスコートされるものだから、少女たちはたちまち累に夢中になってしまっていた。累も累で、言葉巧みに全員の名前とケータイ番号を聞き出してしまっていた。

「何なんですか、あれ」

「文化祭はあいつにとって簡単にナンパできるチャンスってわけ。あんなの、まだまだだよ。累の本番はこれからだって」

「これからって…」

ゆづに100人は入りそうな上映会場だというのに、累が呼び込みをするなら狭いかもしいれないと言った充の不安は見事に適中した。

教室の入り口には累の姿をみつめて歓声をあげている女子高生たちが群がって、人の列は途切れそうにもなかった。

彼女たちの大半は累が目当てのようだったが、なかには充に熱い視線をむけている少女たちもいた。

累より少し低いものの、180センチは超えているだろうすらりとした背の高さに加えて彫りの深い顔立ち、天然パーマのせいだという髪はゆるやかにウェーブがかかって、ハーフの累よりもほどハーフらしい顔立ちだ。遠巻きにしているすら少女たちは顔を赤らめているのに、充の黒い大きな瞳を間近で見たら気を失ってしまうかもしれない。

だが、当の本人は、少女たちの注目はむしろ迷惑といわんばかりに入り口からは顔を背けて知らん顔だ。少女たちも近寄って話しかけたいと思っているのだろうが、近づくなという念力でも発しているかのように、充の半径2メートル範囲内は空席ばかりが目立っていた。

第24話 狐と狸

「俊！」

背中に刺さった聞きなれた声の持ち主は、姉、早織だった。まるでアイドルのコンサート会場のような熱気に包まれた人波をもともせず、早織は俊目指して足早にむかってくると思口一番、

「藤木雫は？ どこにいるの？ 学院中さがしたけど、みつからないのよ。あんた、知らない？」

「雫ならいないよ。彼、モデルの仕事が忙しいみたいで、学院には来ないもん。僕だって、まだ一度しか会ったことないよ。会ったっていうか、見かけたって程度だけど」

「何よ、せっかく藤木雫と知り合いになれると思ってあんたを学院に送り込んだのに。役立たずね」

姉の下心は転校初日に雫をみかけた時から分かっていたが、本人の口から利用されたのだと（藤木雫に早織を紹介したわけではないので、利用されたわけではないが）知ると、気分が悪かった。

「カレがないのは残念だけど…イイ男は雫だけじゃないみたいね」

早織の視線は、めざとく早織のもとへゆっくり歩み寄ってくる累にそそがれていた。

歓声の波をかきわけ、身のこなしも軽やかに累は早織のもとに寄ってきた。

「俊クンのお姉さんですね。はじめまして、松元 累です」

「名前だけは純正日本人ね」

早織は、累の顔に日本人のDNAを探した。だが、栗色の柔らかい髪に、琥珀色の瞳、陶器のような肌質のどこにも、和のテイストは見当たらなかった。

人の目をじっとみて話す癖のある累の視線を受けても、早織は他の少女のように顔を赤らめて顔をそらさず、むしろ琥珀色の累の瞳をまっすぐ見返していた。

「ミシエルという名前のほうが顔とはあいますか？ レネっていうミドルネームもあります。好きじゃないけど、あなただけになら、レネって呼ばれてもいいかな」

「そう呼んでほしければ、呼んであげるわ」

狐と狸の化かしあい、女優の早織の芝居に、累は楽しそうに調子を合わせていた。

「どちらでも、あなたの好きなように」

と、早織の耳元にささやきかけ、累は椅子を引いた。

早織も累のエスコートにはまんざらでもないようで、本物のレディのように優雅な仕草で席についた。

「優しい男はゲイが遊び人と決まっているの。あなたはどっちかし

ら」
「紳士であろうとしているだけですよ、マドモアゼル」
ジェントルマン

その時だった。

「できたぞー」

野太い声が、オクターブ高い話し声を切り裂いたかとおもうと、教室にかけこんできたのは待ちわびていた増山と小島だった。

教室を埋め尽くしている女子高生に小島は一瞬息を呑んだが、増山は完成した映画を上映することしか頭にないようで、女子高生たちにもくれず、映像を焼いたDVDを充に渡すと、DVDはバトンのように充の手からゆかりの手にわたり、ゆかりは手際よくプロジェクターのセッティングを始めた。

第25話 秘めた思い

上映会は回を重ねるごとに盛況になり、最終回に至っては会場に人が入りきらなくなるほどで、他のクラブの嫉妬と羨望の的になっていた。もともと、観客の少女たちの目当ては上映作品であるミュージッククリップではなく、会場にいる累が充だった。

累にまかせきりにしていたチラシには、累と充の写真が大きく使われており、申し訳程度に書かれた映画研究会と上映会についての情報がなければチラシとはわからない。チラシの累と充は互いに向き合った格好で見詰め合っているようにみえる。そんな写真を充が撮らせるはずはないから、大方、手持ちの写真を使って累が合成したのだろう。

端正なふたりの横顔の、今にも鼻を突き合わせて……という合成写真からは、むせかえるような色気が立ち上がってくる。彼らを一目見ようと、少女たちは文化祭の中心地からは少し離れた場所にある上映会場までわざわざ足を運んでくれたのだろう。

実際、彼女たちの関心は上映作品にはなく、累と充であって、ふたりが画面に登場するたび、会場中に黄色い歓声があがった。

女装がバレるのではと内心穏やかでなかった俊だが、観客のほとんどが女子高生で、彼女たちが累と充にしか注目していないと知ると、心配するまでもなかったかとほっとした。上映会の盛況ぶりに覗きにくる学院生たちもいたが、彼らの目的もまた、映画ではなく観客の女子高生たちであって、あれほど女役をイヤがったのは何だったのかと、正直俊は気が抜ける思いですらいた。

「くやしいけど、しばらくはマツゲン先輩に逆らえそうもないね」

後片付けをしている俊たちをよそに、累は名残惜しそうに会場に漂っている観客数人と話しこんでいた。どうせケータイの番号を交換しているか、デートの約束を取り付けているのだ。

映画のテーマを恋愛に決めたのも、その後ミュージッククリップに変更になっても恋愛を歌った曲にしろといったのも、観客を呼び込んできたのも、すべて累だった。累の助言と尽力がなかったら、初日からの成功はなかっただろう。

「うん、堀口、僕、くやしいよ」

てつきり、成功に酔っているとばかりおもっていた増山は、意外にも浮かない顔だった。

「充先輩やマツゲン先輩を映画に出演させたら、絶対観に来てくれる人はいると思ったんだ。ふたりは学院のアイドルだからさ。それで、僕、ふたりに映画に出てくださって頼んだんだ」

「すごいアイドルっぷりだよ。僕もこの目でみるまでは信じられなかったけど」

「作品は観てもらわないと、どうしようもないから、内容は考えないで、とにかく先輩たちに出てもらうことだけを考えててさ。でも堀口が学院に来て、ぱっと脚本が浮かんで、撮りたい作品だったけど、マツゲン先輩が観客の好みがどうのって言い出して」

「あの最初の脚本、撮りたがってたもんなあ……」

女役を嫌がる俊に「君でないとダメだ」と言った増山、先輩たちのアドバイスにも「これが撮りたい」と言った増山を、俊は覚えている。ずり落ちたメガネを乗せた鼻の頭に汗をかいて、増山は必死

に抵抗していた。

「自分の思う作品を撮りたい気持ちと、内容はどうでもいいからとにかく観てもらいたい気持ちとがあって、結局、観て貰わないことには始まらないから、って、先輩たちのアドバイスに従ってさ。映画はミュージッククリップになっただけ…」

声だけは女になれないという理由で、映画はミュージッククリップに変更になり、内容は俊の女装した女子高生をめぐって累と充との三角関係というものになった。曲も、もどかしい恋を歌ったものが選ばれた。

「来年は、ちゃんと観てもらって評価してもらえる作品をつくる。うん、つくるよ、堀口！」

増山はきつと唇を結んだ。

「うん、そうだね」

「そこ、何ふたりでこそそこそしているのかな？」

新しく加わった番号のつまったケータイを手に、累が近づいてきた。

「先輩のモテっぷりにあきれていたんですよ！」

と俊が言つと

「まだ初日だよ。煌々祭はあと2日あるからね。まだまだこれから」

累がそう言っているかたわらで、メールの着信を告げる音が累の
手の中で鳴っていた。

「誰か、ゆかりさんのジャケット見なかったか？」

ゆかりを駅まで送ると言って、ふたりで出ていったはずの充が戻
ってきた。

「たいした紳士ぶりだね」

累は、椅子に置き忘れられているモスグリーンのジャケットを充
に手渡した。

「勝ち目はないんだ。やめとけ」

「お前の指図はうけねえよ」

充は累をにらみつけると教室を出ていった。

いつものふざけた調子とは違う。仲がいい充と累でも言い争うこ
とがあるのだと俊はあっけにとられていた。

「なに？ なんなのさ？」

「充先輩はゆかりさんが好きなんだよ」

増山がそつと耳打ちした。

「そうなの？ でも、ゆかりさん、結婚してるよ」

「だから、勝ち目がないんだろ？ 堀口、お前、にぶいよ、にぶす
ぎ」

第26話 軽すぎる封筒

「沢井さん、これ、頼まれてたチケット」

雫は、開けてもない封筒をそのままマネージャーの沢井に渡した。表には、マンションの住所と沢井の宛名が印刷されている。マンションは、沢井の名前で事務所が借りた部屋で、仕事が忙しい時に雫が寝泊りに使っている。

「お、サンキュー。御園学院の文化祭の後夜祭のチケットってなかなか手に入らないからね。これで、おばさんに顔が立つよ」

数年前までタレントをしていた沢井は、背も高く、年も雫と10歳ほどしか変わらない。まだまだ表舞台で活躍できそうだというのに裏方のほうが性にあうらしく、マネージャーに徹しているが、雫にとっては兄のような存在だった。

「でも、いいのかい？ 誰か誘いたい人がいたんだったら悪いなあ」「いいですよ、そんな人いませんから」

夏少し前、雫は沢井に、御園学院の後夜祭のチケットを手に入れたくないかと頼まれた。文化祭には一般人も出入りできるが、後夜祭は学院生の肉親と、学院生に招待された人間だけに限られている。将来有望な学院生たちと親密になれる機会とあって、後夜祭に参加したがる女性は少なくなき、巷に流れ出たチケットは高値で取引されている。

沢井に頼まれるまま、雫は手配をし、チケットはマンションの部屋あてに届けられた。

「文化祭、昨日からだよね？ 仕事入れておいて何だけど、学生のうちは、学生でないとできないことを楽しんだほうがいいよ」

沢井の言い分はもつともで、雫は何も言い返せない。この日も、コマーシャルの撮影で、朝からスタジオにこもりつきりだった。

仕事が好きなのではないが、雫は仕事を理由に学院には近寄ろうとはしなかった。学生生活よりも大切なものが、生きる目的が雫にはあった。かつて愛した人、ナツミを捜しだすこと、それが何よりも最優先なのだ。

「そうだ、忘れるところだった。これ、夏に頼まれてた調査依頼の報告書」

今度は沢井が書類を雫に渡す番だった。A4サイズの茶封筒には「調査報告書」の文字が躍っている。雫は礼の言葉もなく、震える手で報告書を受け取った。

この夏、御園学院卒業アルバムに偶然ナツミの姿を発見した雫は、写真をこっそり切り取り、写真の少女、ナツミを捜しだしてくれと沢井に頼んでいた。報告書にはナツミの正体と行方が記されているはずだ。

「雫から預かった写真と下の名前しかわからなくてどうなるかとおもったけど、さすがプロだね」

沢井はプロの探偵に依頼したらしい。封筒には社名が印刷されていた。

封筒は軽かった。取り出した書類もわずか2、3ページほどの薄さで、最後のページは新聞記事のコピーだった。タイプされた報告書よりもまず、記事のコピーに雫はまず目を引かれた。つぶれた文字を追ううち、雫の目からは光が失われていき、雫はパイプ椅子から崩れ落ちた。

第27話 ブラックホール

「俊くん、まずいことになったよ」

映画研究会初の文化祭が成功に終わり、上映会となった旧視聴覚室に感謝の気持ちをこめて掃除をする俊たちのもとに、掃除ときいて逃亡していた累が戻ってきた。

「何がですか、マツゲン先輩」

掃除をさぼった累に、俊はぶっきらぼうな声を投げかけた。

「愛役をやっているのが、実は俊くんなんじゃないかってウワサになっててね」

その瞬間、モップがけをしていた俊の手が止まった。

俊は累の表情を読み取ろうとした。真面目な顔をしているときほど、累はふざけていると、ここ少しの間の付き合いでわかってきた。そして、夕映えに明るみを増している瞳は笑ってはいなかった。

「ウソですね、マツゲン先輩。そうやって僕をからかっているつもりなんでしょうけど、その手には乗りませんから!」

そんな冗談を言っているヒマがあったら掃除を手伝ってくれと俊は続け、自分が持っていたモップを累に手渡した。だが、累はモップを受け取らなかった。

「あれ? ボクのこと、信じてないね」

「信じられせんっ！ マツゲン先輩には前科がありますから！」
「でも、本当のことなのに」

俊はふたたび累の顔をじっと見た。累は笑っていた。累の笑顔は要注意だ。彼の真意は笑顔のときほど読み取れなくなる。

「まさか…」

「カントク、俊クンのウワサのコト、聞いてるよね？」

俊と累と同時に視線を向けた先の増山は、俊を気遣ってか戸惑いながらも軽くうなずいてみせた。

「堀口って、わかるものかなあ」

増山は首をかしげている。それほど、俊の女子高生姿は堂に入っていた。

掃除どころではない、俊はモップを投げ出し、頭をかかえて床に座り込んでしまった。

上映会に押し寄せた観客のほとんどが女子高生、たまに見かける学院生たちは、映研のあまりの盛況ぶりに偵察にやってきたか、会場の女子高生たちを自分たちのクラブに誘おうとする連中ばかりだった。どちらにしろ、上映作品などに興味はなく、クリップをまともには観ていない。累と充に思われる女子高生役を演じたのがまさか男の自分だとは誰もおもってもいまい、あれほど女役を拒否した自分が子どもに思えたほど安心しきっていた俊は、いまや不安の底なし沼に体半分浸かってしまっていた。

「だから女役はイヤだって言ったのに……。バレたら、どう責任と

つてくれるんですか、マツゲン先輩……」

普通の高校生活が去っていく、その足音までも俊には聞こえるような気がしていた。

「バレない自信があるって言ったのは俊くん、キミだよ。忘れた？ それと、もしバレたら責任をとるのは充だから。充の“彼女”ってことで丸く収まるでしょ」

「おい、俺はそんな責任を取るとは言っていないぞ」

「ともかく」と、累は充を遮り、続けた。

「俊くんと、愛役の女の子は別人だと思わせればいい訳で」

「そんなこと、できるんですか……」

俊は累を疑いのこもった目で見据えた。俊には、累は救いの神というより、問題を次から次へともってくる厄病神にしか見えない。

「俊くんのお姉さん、早織さんに来てもらったらどうかな。早織さんに愛になってもらって、俊くんとふたりでいるところを人に見てもらおうと」

「マツゲン先輩っ！」

累はたちまち厄病神から白馬にのった騎士に昇格した。

「とー おもったんだけどね、早織さん、仕事で忙しくて来れないっていうんだ」

俊は今度はブラックホールに突き落とされたような気がしていた。

第28話 暗闇にさす一筋の光

文化祭などに興味はなかったのに、撮影を終えた雫の足は自然と煌々祭の行われている御園学院へとむかっていた。

午後5時から始まった後夜祭には、チケットを持つ招待客だけが参加できるため、思うほどの混雑はなかった。時折、モデルの藤木雫だと気付く人間がすれ違いざまに視線を投げかけたが、雫はふりかえりもしなかった。

夕焼けに照らされた校庭には、後夜祭のためのステージが設置され、ラッフル大会が行われていた。賞品はとも一般人の手には届かないものばかり、そんななか、笑いを誘うようなチープなものも紛れ込んでいる。ラッフル大会が終われば、実行委員が招待したアーティストによるライブが始まる。

国内外を問わず、有名なアーティストを招待してのライブを催すとあって、毎年、後夜祭のチケットは巷では高値で取引される。チケットは学院生と学院生の招待客にしか発行されないはずだったが、どこかに市場原理が働いているのだろう。

18年前、雫はナツミを後夜祭に招待した。小島、ナツミの友人のゆかりを交えて4人で何となくいつも一緒にいるというのではなく、ナツミとだけ過ごしたいという気持ちが強まって誘ったのだと前世でのその時の気持ちを雫は今もはっきりと覚えている。

ナツミだけを誘うとあって、ひどく緊張してしまい、彼女に対する気持ちを伝えるつもりで2人きりになろうとしたのだが、結局、何もそれらしい言葉を言えずに後夜祭は終わってしまった。

ナツミに対する思いは、生まれ変わった今も体に残る。だが、会いたいと願うその人は、今は亡き人だった。

1枚の写真を手がかりに行方を捜した愛しい人は、15年前に事故に遭って亡くなっていた。探偵社からの報告書に添付されていた新聞記事のコピーには、ナツミこと森 奈津美が死亡した自転車事故について書かれてあった。

愛する人を失った世界は暗闇だ。記事を読んでいくうち、雫の五感のひとつずつ失われていった。目は光を失い、自分の鼓動すら聞こえなくなった。闇のなかで上下も分からず、魂だけが手足をもがれて漂っている。

奈津美のいない世界に、生きる意味はない。生きるとは奈津美だ。愛するとは、自分とは違う血の流れを自らの中に感じることだ。

奈津美がいない――絶望感に打ちひしがれながら、だが、雫は一筋の光をみた。

自分は奈津美に会うために生まれ変わった。それならば、奈津美もまたこの世に生まれ変わっているのではないか。

そう思うと、胸に火が灯った。たちまち血潮が体中を駆けめぐる。

ふと、いつかの日に見た少女の姿が目の前をよぎった。

図書館の窓から遠目に見かけただけの少女だが、ほんの少し心が動いた。雫が覚えているのは高校生の奈津美だけだから、同じ年頃の少女には自然と目がむかってしまう。奈津美は生きていると思っていたその時には、少女が奈津美のはずはないと打ち消した錯覚だ

ったが、死んで生まれ変わっているのだとすれば、ちょうどあの少女ぐらいの年齢のはずだ。

少女は、増山や生徒会長たちと親しげに話をしていた。もしかしたら後夜祭に招待されて来ているかもしれない。

雫の目は、つい少女たちの姿を追ってしまっていた。後夜祭に招待されている少女たちは制服を脱ぎ捨てて、せいっぱいのおしゃれをきめこんでいる。大人への憧れから背伸びした格好が目立つが、かえって若さと幼さを際立たせてしまっていることに少女たちは気付かない。彼女たちの中に、もしかしたら、奈津美の生まれ変わりがいるのだろうか。奈津美ならば、自分が気付かないはずはない。たとえ外見は変わっていたとしても、魂は同じ輝きを放って自分はまだその人と恋に落ちる。

雫はゆっくりと目を閉じた。目につくる物に惑わされるな、心が動く人がいれば、それが奈津美だ。

目を開けた雫の鼻の先を、ひとりの少女が急ぎ足でかけ抜けていった。

見覚えのある少女に、雫の心が少し揺らいだ。雫の目の前を走り去っていったのは、図書館脇の坂道でみかけたことのある、あの少女だった。

第29話 早替り

取り急ぎ、累が演劇部から“借りて”きた女物の衣装をまとうなり、俊は寮の部屋を飛びだしていった。早織をあてにできないとなると、俊がまた女装するほかはない、それが累の提案だった。

映研の上映作品に出演した女子高生が俊であるとは、増山をはじめ、制作にかかわった人間以外には知られていない。だが、映像をみた学院生のなかには、女子高生が俊に似ているとおもったものもいて、俊の女装ではないかという噂がひろまっていた。

事実そうなのだが、俊にとっては隠しとおせるものなら隠したいことで、噂を否定するには俊と女子高生とを同時に目撃させたらいいのではと累がアイデアを出した。

俊の姉、早織に女子高生役をやってもらえばいいと累が言い出したときには、累が輝くばかりの救いの主にみえたのだが、肝心の早織は仕事を離れられないという。

「俊くん、しょうがないから、二役ね」

累のその提案を、俊は断れなかった。30分ごとに女子高生に扮し、増山にぴったりとついで学院内をまわる、俊に戻るときは、ひとりで歩き回り、できるだけ人目につくようにすること、累はそう言い、「早替りは慣れたものだよね」と憎めない笑顔で笑った。

「増山……」

校庭に増山の後ろ姿をみかけた俊は、声を出すなと言われたのも

忘れて話しかけようとし、はっと口をつぐんだ。

振り返った増山は困ったような顔でかすかに首を横に振り、来るなと目が訴えていたが、すでに俊の姿は相手にとらえられてしまっていた。

「こんばんは」

直前まで増山と話をしていた相手、高等部1年武田良彦は、軽く頭を下げて挨拶した。

校庭の特設ステージ上では、俊が楽しみにしていたラッフル大会が行われており、豪華賞品が次々と学院生と招待客たちに手渡されていた。

「増山から聞いたんだけど、君、堀口の従姉妹なんだって？　ということは、堀口のお父さんの兄弟の子ってことだけど、確か、中村扇之介は一人っ子で兄弟はいなかったとおもうんだけど……」

武田は正体をさぐろうとするかのように俊の顔をじろじろと見回した。垂れ目のせいで黙っていても笑っているようにみえる武田だが、本当に笑っていても目の芯が笑っていなくて、俊はどこかひんやりするものを感じた。

「せっかくだから、後夜祭のライブ、一緒に楽しまない？　ああ、堀口も呼ぼうよ。増山、堀口がどこにいるか、わかるか」

武田は、遠まわしに、お前は堀口だろうと言っていた。

「あ、ああ、その辺をぶらついていると思っけど……」

演技が下手な増山は、眉根を寄せて、ついた嘘を謝ってみせた。

「よし、堀口を捜しにいく！」

武田が先頭切って歩き出し、増山と俊はその後についていかざるを得なかった。

第30話 ハーメルンの笛吹き

“堀口をみかけなかったか”――歩いていった先でクラスメイトにあうと武田は開口一番、そう尋ねた。

30分前、俊は学内をうろろしていたので、返ってくる答えは、体育館脇でみかけたの、寮にいるんじゃないのかと、まちまちだった。

最悪だったのは、武田が、俊と俊の“従姉妹”である女子高生とでライブを楽しもうかとおもっていると言つと、女子高生は実は俊なのではないかと疑っている連中はおもしろがって武田や俊たちの後についてくることだった。

そうして、俊の行方を尋ねてまわる集団ができあがりつつあり、武田一人ならどうにかまいてしまえたのを、俊は罨にかかったように身動きがとれなくなってしまった。

「どうするよ……」

まるで連行されるかのように俊にぴたりとついて歩き回る増山が小声でもらした。

「どうするって、こっちが聞きたいよ……」

女役がバレたらまずいのは増山ではなく、俊の方だ。処刑場へでも連れ出されるかのように、俊の足取りは重く、地面をひっかくように歩いていた。

「カントク、どこいくのさ？」

夕闇せまるなか、声をかけてきたのは、累だった。助かったばかり、増山と俊は累を情熱的に見つめた。

「マツゲン先輩。先輩、堀口をみかけませんでしたか？ 僕ら、堀口を捜しているんです」

「俊クンねえ…」

目の前にいる女子高生が俊だとわかっていながら、累はとぼけた返事をした。

どこでもいいから、どこかで見かけたと言ってくれと、俊は目で訴えた。

「そうなんだ。じゃあ、一緒にいくとするかな。ボクも俊クンをさがしているんだ」

累がそう言った瞬間、俊はその笑顔を顔面から潰してやりたい衝動にかられた。

「先輩、何やってるんですかつ！」

他の人間に気づかれないよう、俊はこっそり累に近づき、小声で、だが、強い調子で累を責めた。

「何って、俊クンをさがしに」

「冗談言ってる場合じゃっ！ もしバレたらどうしてくれるんです？」

「その時は、確か、ミツが責任をとるって」

「そうじゃなくてっ！ そうならないよう、どうにかしてください

っ！」

「どうにかって言われても、俊クン、ここにいるしねえ」

「マツゲン先輩、何こそこそ話ししてるんですか」

武田がいぶかしげに俊と累を振り返った。

「あ、俊クン！」

名前を呼ばれて俊は思わず累の方を向いてしまった。

だが、累の視線はとなりの俊ではなく、はるか彼方の黒く小さな影をとらえていた。

「累！」

小さな影に寄り添う大きな影が答えた。声の主は充だった。

近づいてきたふたつの影を目の前に形として見た時、俊はわが目を疑った。充のとなりには、自分が立っている。正確に言えば、俊の制服を着て男装した早織だ。夕闇に輪郭がとけて、女とは、早織だとはわからない。

「カントク、累、ライブが始まる！」

「今いくっ！」

累に腕を引かれる前に、俊と増山は充のほうへ駆け出していた。背中には武田の視線がねつとりとからみついでいて、俊は一刻もはやく視線の糸を断ち切ってしまったかった。

*

「仕事が忙しいんじゃないかった?！」

武田たちが去っていき、関係者たちだけになると俊は開口一番、早織につめよった。

「仕事? 今日はずっとオフだけど? 零に会えるかしらとおもって文化祭の2日間は仕事を入れてなかったの」

俊は累を睨みつけた。累は知らぬ顔で70度の方向を見ている。その形のいい顎を、できるものなら俊は下から殴りつけてやりたかった。

その後、早織からすべてを打ち明けられた俊は、今度は累の細い首をしめてやりたい殺氣にかられた。

「ごめん。女子高生より男子高校生に化けるほうがおもしろそうだなって言ったら、累くんと充くんがノっちゃって。俊が女子高生の間は、私が俊としてそのへんをうろちょろしてたの」

「…充先輩も1枚噛んでるんですかつ!」

「堀口の女装がバレると、俺の“彼女”ということになるからな」

「とーにかく、これで俊クンの女装疑惑は晴れたわけだし、“終わりにければすべてよし”」

「よくないですっ! なんか、ものすごく気分が悪いんですけどっ!」

第31話 金木犀の夜

文化祭が終った直後、燃え尽きた灰のような状態で受けた中間試験の結果は…最悪だった。

“普通”の学生生活には、稽古の時間を気にせず友だちと放課後を自由に過ごせるというおいしい実の部分もあったが、普通の学生生活には試験という苦行も課されていたのを、俊はすっかり忘れていた。

追試を受けるはめになった俊は、翌日にひかえた試験のために徹夜覚悟で机に向かっていた。

歌舞伎役者だった頃は、稽古だから、舞台があるからと理由をつけて、勉強をしなくても周りからとやかく言われたりはしなかった。学生でありながら歌舞伎役者として活躍する場合のおいしい実を十分に堪能していたわけだが、普通の学生宣言をした今、勉強をおろそかにするわけにはいかない。

ろくな成績を取っていないと知れたら、それみたことか、お前に普通の学生生活なんか送れるものか、と得意げな顔をするだろう父の姿を想像するだけで腹がたつ。何がなんでもいい成績をとって父を見返してやるという意地がわきおこると、眠気もふきとんだ。

床に落ちたコップがけたたましい音をたてて砕け散ったところで俊は飛び起きた。ノートを枕に、いつの間にか机につっぱして眠ってしまっていたようだ。

夢だとばかり思っていたら、聞こえていたのは、本当に窓ガラスが割れた音だった。

床にガラスの破片が散って、割れた窓から秋のひんやりした空気にまじって金木犀の強い香りが部屋に入り込んできていた。

と、暗闇の穴から白い手がぬるりと伸びて、鍵を探しあてたかと思つと、窓が開いて次の瞬間には人が部屋に飛びこんできた。

「まったく、窓の鍵は閉めんなっていつてんのにつ」

男は藤木 雫だった。

あまりに軽やかに音もなく部屋へ忍びこんできたので、俊の半分寝ぼけた頭は、それが本物の藤木雫だと認識できないでいる。

上から下まで黒ずくめの格好で、細い体は影法師のようにゆらゆらと揺れている

―死神か悪魔か―

服についたほこりをはらう様子も、俊の目には翼をはばたかせているように見えていた。

「なあ、オレがいない間、ラブホがわりでも何の目的にも部屋を使ってくれてかまわないが、鍵だけは開けておけていったはずだろ」

いらいらとした雫の声が、俊を現実引き戻した。

確か、累と増山は、戸締りだけはしっかりしておくようにと言っていたはずだが。

「こ、ここは僕の部屋だよ。そっちこそ窓ガラス割って―」

入ってきて…と言葉を続けるよりも先に体が動いていた。俊は雫のもとにかけより、手をとった。

「何だよっ」

「ケガはしてないみたいだね」

雫はすぐに手を引いてしまった。窓ガラスを殴ったせい、指の関節部分がところどころ赤くなっていたものの、出血はなく、俊はほっと胸をなでおろした。

ケガがなくてよかったと安心したとたん、今度は怒りがふつつとこみあげてきた。

「何だって、窓から入ってきたりするんだよ！ 危ないじゃないのさ！」

「門限すぎてんだろ。玄関から入れないんだから、窓から入るしかないじゃねーか。ったく、鍵はあけておけていっておいたのに…」

「鍵を開けていたら、無用心じゃないか」

「オレの部屋だ」

「もうそうじゃないよ。僕だっているんだから」

「…そういえば、オマエ、誰だ？」

“不法侵入”したはずの雫は悪びれる様子もなく、俊をまっすぐに見据えている。その視線の力に負けるものかと俊も見返した。

「転校生だよ、堀口 俊。よろしくー」

俊の自己紹介を聞いているのかいないのか、俊には背中を向け、雫は左側の収納トビラを開けた。「そっちは僕の…」と、俊が言い

かけると、雫は今度は右側のトビラをあけ、そこにジャケットを放り込んだかと思うと、そのままベッドへ倒れこんでしまった。

時計をみると時刻は夜中の2時を示している。

こんな時間に寮に戻ってくるなんて、門限はとっくに過ぎているし、寮に入れないからって窓から、しかも窓ガラスを割って入ってくるなんて、どうかしている。

ごめんの一言もなし、よろしくの挨拶もなし。

雫の態度にむっとしつつ机に向かったものの、寝息をたてている雫が気になって、試験勉強に集中できない。

教科書の同じ行ばかりをくりかえし読み続けているうちに夜が明けてしまった。

第32話 鼓動

数学の追試験の試験監督を任された小島は、教室にいる生徒たちをみて呆れていた。他の生徒にまじって、増山と俊がいる。よりもよって、自分が相談役を務める映画研究会の会員2人ともが追試を受けるようでは、顧問としての監督責任を問われても仕方ないではないか。

「お前ら、何で俺の授業の追試受けるハメになっただよ」

「先生こそ、相談役なんだから、問題を教えてくれたってよかったじゃないですか」

「そんなことするわけねーだろーが。勉強する、しないは学生の責任だろ？」

増山の泣き言は聞き流し、小島が試験問題を配り始めたその時、教室にすべりこんできた生徒がいた。

彼は俊のすぐ後ろの席についた。かすかに息を切らしているのが、背中ごしに伝わってきた。嗅いだことのある甘い香りが鼻をくすぐった。脳裏に8月の暑い日がよみがえる。今は10月の終わりだ。

「起こせよな」

振り返ると、起きたばかりの雫の寝ぼけた顔があった。

*

どくどくどく……。腹の底から喉元までジャンプする勢いで鼓動する心臓から押しだされた血液は、押し出された勢いそのままに体中

をめぐり、薄い皮膚を波立たせ、通りすがりに毛という毛を逆立て、スピードを保ったまま心臓へと戻ってくる。そして加速度を増して、体の末端へとまた飛び出していく…。

体のすみずみに酸素をいきわたらせるのが血液の役目だというのに、かえって息苦しい。俊の体に寄生する生き物のように、思い通りにならない心臓の激しい鼓動のせいで肺が圧迫されて息ができない。

どんな大きな舞台でも俊は緊張したことがなかった。父親の弟子たちは、緊張のあまり心臓が口から飛び出しそうだという表現をよく口にしていたが、俊に限っていえば、緊張とは無縁で、肝がすわっている、きつと大物になると祖父にも言われたりしたものだ。

そんな俊が緊張していた。

椅子に座っていても、落ち着かない。背中越しに体温が伝わってきて、まるで雫に抱かれているような錯覚にすら陥る。

雫の長い腕が絡みついて、耳元に熱い息がかかる…感覚が生々しいのは、想像力がたくましいのか、記憶なのか――

「おい」

答案用紙が脇から差し出されていた。いつのまにか試験は終わって、答案用紙を後ろから前に送るように小島が指示していた。

「オマエ、顔赤いぞ」

「え…あ…あつと…」

俊の顔をのぞきこんだ雫の視線を避け、何も書かれていない答案用紙の上に重ねて、増山に渡し、おそろおそろ後ろを振り返ると、ほんの数十秒の間に、雫の姿は消え去ってしまっていた。

第33話 割れた窓ガラス

「藤木のヤツ、また、派手にやってくれたな……」

俊の部屋の割れた窓ガラスを目の前に、小島は頭をかきむしった。

「またって？」

「今回で……」

累が指折り数えて

「5枚目、かな」

「5枚目！」

驚いているのは俊だけで、累は平然としている。

寮に誰かが侵入したという噂をきいたので俊の無事を確かめに部屋をのぞきに寄ったと累は言っていたが、心配している様子はまったくくない。

「いつそ、窓を外したらどうです、先生。ここに窓がある限り、彼、割り続けますよ」

「学院に戻ってくるたびに、夜中に窓ガラス割って入ってくるんですか？」

「毎回割るわけじゃないけど、ドアからは入ってこないね」

「毎回割られたら、たまったもんじゃないぞ」

舎監としての小島の頭には、新しい窓ガラス1枚いくらかという数字が浮かんでいるらしい。

「ドアから入ってこないって、マツゲン先輩、何で知ってるんです？」

「マツゲン、お前もこの部屋の使用者か？」

「やだな、先生。ボクはひとりになりたいときにだけしか使いませんよ」

「お前みたいなヤツが女連れ込んだりするんだろーが」

「そういうことはボクは外で済ませてきます。他のやつと一緒にしないでください」

「そついうこと！？」

眉をしかめて、俊は思わず腰掛けていたベッドから飛び上がった。

「そつ、そつちのベッドだよ」

戸締りをしっかりするようにと忠告された訳がわかった。

俊が転校してくるまでは雫ひとりの部屋で、事実上は誰も使っていない部屋は互いの目が気になる寮で一人に、または二人きりになるにはおあつらえむきの部屋でもある。戸締りしてなかったら――

「戸締りしてなかったら、俊くん、襲われていたかもね」

「！」

「若い男が、男だけだとするとイロイロあるんだよ、俊くん」

人事だと思って、累は笑っている。

「ちゃんと戸締りしてて、よかったでしょ？　今まで無事でいられたんだから」

「堀口は無事かもしれないが、窓ガラスがめちゃくちゃだろ……。堀口、藤木が部屋に戻ったら舎監室へ来るように伝えておいてくれ」

後頭部をなでながら、小島は痛いなどぶつぶつ呟きながら部屋を出ていった。

「彼と話した？」

「夜中に戻ってきて、すぐ寝ちゃったから、話どころじゃなくて…。ちゃんと自己紹介だっと思ってないんです」

「する必要もないかもね。どうせ彼がいるのは試験期間中だけだから。試験が終わったら、またいなくなるよ」

「仕事が忙しいのかな」

「さあ、どうだろう」

累が顔をしかめた。割れた窓ガラスの縁を撫でていた指先から血が滲んでいた。

第34話 真夜中のランウェイ

結局、雫は部屋に戻ってこなかった。

戻ったら小島に呼び出されていると伝えようと思っていたのだが、雫のほうでも叱られるとわかっていて姿を消したのだろう。

夕食を済ませると、俊は舎監室へむかった。

小島の命令で、充が英語を覚えてくれることになっていた。もちろん、増山も一緒にだ。翌日は英語の追試が控えている。相談役としてふたりを留年させるわけにはいかない、小島は息巻いていた。

「堀口、藤木に舎監室に來いって言ったか？」

俊の顔を見るなり、小島は割れた窓ガラスを思いだした。

「彼、部屋に戻ってきてないんです。仕事に戻ったんじゃないですか？」

「明日も試験があるんだ、絶対寮にいるはずだ。ったく……」

「雫も、ですか？」

「お前たちと同じ、あいつも全教科追試だ。もつとも、お前らとは違って、試験期間中に試験が受けられなくての追試だけだな」

小島は意地悪く、「試験が受けられなくて」という部分を強調してみせた。

「藤木と違って、お前たちは勉強しないと、ほんとに留年するぞ」

充までが意地悪な口のききかたをする。

「あいつはどういうわけだか成績だけはトップクラスだからな。出席日数が足りなくて留年したけど、お前たちが留年したら来年は研究会の活動は停止だからな」

小島の脅かしに増山は真っ青になっていた。

「留年って？」

「俺と同年」

充と同じ学年――初めて見かけたときに抱いた年上だろうかという印象はあたっていた。大人びた人だなあと思ったのと同時に、寂しそうだと感じたのは、年下と同じクラスでは孤立してしまうせいかもしれない。

学院であまり姿をみかけないのは、仕事が忙しいという理由ばかりでもなさそうだ。

*

充と小島にみっちりとしぼられ、部屋に戻ってきたころには消灯時間を少し過ぎてしまっていた。

部屋の明かりをつけると、ベッドに寝ていた雫が不機嫌そうに呻いた。

「ぐめん、いると思わなかったから」

長い手足をのばして雫がベッドに横たわり、その手は目を覆って、

まぶしい部屋の明かりをさえぎっていた。

転校してきて以来、ひとりで部屋を使うことに慣れてしまって、雫がいるかもしれないという気がまわっていなかった。いつの間に戻ってきていたのか。

「食堂、まだ開いてるか？」

「もう閉まってるよ」

雫は勢いをつけてベッドから起き上がると、大きく伸びをした。長い手足が何倍にも伸びて天井に届きそうだった。俊なら数歩はかかるドアまで、雫はほんの数歩で歩いてきた。

「どこいくのさ？」

「食堂」

「だから、閉まってるって」

「聞こえてるよ、おせっかい」

俊を追い払うように片手をひらつかせ、雫は廊下を食堂へむかって歩いていった。

見慣れた廊下がショーのランウェイになり、蛍光灯の光がスポットライトになる。

ただ歩いているだけなのに、身のこなしが優雅にみえるのはモデルだからなのか、初めて見かけたときと同じように、俊は雫の後ろ姿から目が離せなかった。

第35話 キッチンの鼻歌

閉まったはずの食堂で何をするというのだろう―部屋を出ていったきり、雫は戻ってこなかった。

小島の伝言を言い忘れたのを思い出したが、消灯時間を過ぎてから押しかけられても小島も迷惑だろう。戻ってきたら伝えればいいと思っていたら、いつまで経っても雫は戻ってこない。

待つだけ時間の無駄だと、俊はタオルを手にシャワー室へむかった。

シャワー室のすぐとなりは食堂だった。閉まっているはずの食堂から、うつすら光が漏れていた。

誘われるように入っていくと、誰もいないはずのキッチンで調理器具を操る金属音がしていた。のぞきこむと、雫が中華なべをふるってチャーハンを作っていた。

出来上がったチャーハンを皿に盛り付け、テーブルに運ぼうとして、雫はようやく俊に気づいた。

「何だ、オマエも腹へってんのか」

「喉が渴いたから、降りてきたただだよ」

「自販機ならむこうだぞ」

皿に両手をふさがれ、雫はあごで食堂の奥を示した。明かりの落ちた食堂で、自販機だけがぼんやりと光を放っていた。

喉が渴いたとウソをついた手前、俊は仕方なくウーロン茶を買った。

雫はといえば、窓際の席に陣取って、暗闇のなか、ひとりで黙々と遅い夕食を口にしていた。

「シャワー浴びに降りてきたんじゃないのか」

雫の目が俊の腕にかけられたバスタオルをとらえていた。

「浴びてきたトコ」

「タオル、濡れてないぜ」

ウソの上塗りは雫には通用しなかった。

「それ、明日のみんなの朝ごはんだよね」

明日の朝食に炊いてあった白飯は、雫の胃袋へ流し込まれている。

「オレの分だから、朝食べようと今食べようとかわないだろ？」

めちやくちな理論だが、間違っではないない。俊はあえなく降参した。

食堂の明かりをつけ、俊は雫の真正面に座り、買ったばかりのウーロン茶のペットボトルを差し出した。

「ウーロン茶、飲む？」

「緑茶がいい」

甘えているのか、命令しているのか、雫の感情はつかみ取れない。

「チャーハンにはウーロン茶だよ」

俊の好みを押し付けても、反論するわけでもなく雫は黙ったまま、チャーハンを食べ続けている。

俊も黙って、食事をする雫をみつめていた。食事中の犬にちよっかいを出すなと言われたことがあったが、雫はまさに食事中の犬で、話しかけようものならば今にも噛みついてきそうな空気をまとっていた。

「食うか？」

雫が皿を差し出した。

「オマエ、本当は腹減ってんだろ？」

空腹ではなかったが、俊はすすめられるまま、チャーハンを口に運んだ。

「ん、おいしっ！」

「全部食っていいぞ」

俊が漏らした言葉に、雫の表情が和らいだ。手際のよさといい、味付けといい、お世辞抜きに雫の料理の腕前は相当なレベルだった。

「料理、上手だね」

「食ったら持つて来いよ、片付けるから」

気をゆるしたように思えたのは一瞬で、雫はぶつきらばうにそう
言い捨て、さつさとキツチンへ引っ込んでしまった。中華なべを洗
う音にまじって雫の鼻歌が聞こえてきた。

第36話 ニューヨーク

12月のニューヨークは色とりどりの光であふれかえる。ロックフェラーセンターの巨大クリスマスツリーをはじめとして、街中がイルミネーションに飾られ、街そのものがクリスマスプレゼントのような装いに、寒々しいはずの冬景色が華やいでみえる。

街をいく人々は身を切られるような寒さにさらされながらも、愛する人たちへのプレゼントを抱え、穏やかな表情を浮かべている。カフェの窓越しに見る、ストリートを行き交う人々の笑顔につられて、雫の頬も緩んでいた。

初めてニューヨークを訪れたのは16の時だ。幼い頃からどういうわけか、雫はニューヨークにひきつけられた。いつかは行ってみたい、そう思い、モデルの仕事で得た金で渡米した。

ニューヨークに降り立った時、初めて訪れる土地だというのに、知らない土地ではないという感覚に襲われた。そぞろ歩く街並みのところどころに見覚えがある、踏み出す一步一步にためらいがなかった。

道路やビルの壁にしみこんだ街のにおい、街を縦横無人に走り抜けるイエロータクシーのエンジン音やクラクション、地下鉄の空気孔から吹き上げてくる生暖かい空気…移り気な女のように外見は変化するものの、街そのものの体臭は変わらずに雫に懐かしさと呼び起こさせた。

それもそのはず、ニューヨークは、雫の前世、芳賀^{はが}敦^{あつし}が最後の夏を過ごした場所だった。

芳賀 敦が旅先のニューヨークで事件に遭遇したと知ったのは、卒業文集にあった小島の文章からだった。御園学院で共に学び、映画に情熱を傾けた友を若くして亡くした小島の文章は混乱していて、かろつじて雫が読み取れた事実は、芳賀敦は高校2年の夏にニューヨークに行き、そこで何かしらの事件に巻き込まれて死んだということだつた。

子どものころ、雫はよく悪夢に悩まされた。

知らない街を歩いている。角を曲がろうとすると人が飛び出して、ぶつかった拍子に胸に衝撃を受け、叫び声をあげて飛び起きる。夢だというのに、心臓は穴があいたような痛みを覚えてしばらくは息ができなかった。

事件については、古い新聞記事で知った。日本人の高校生がニューヨークで事件にあったとすれば新聞に報道されているはずだともったら、社会面に記事が載っていた。

芳賀敦は、旅先のニューヨークで拳銃強盗に出くわした。強盗は別の場所で盗みを働き、逃走しているところを、たまたま曲がり角を曲がった芳賀敦と出会いがしらにぶつかり、勢いで拳銃の引き金を引いてしまった。

雫は、だから街角を曲がるのは苦手だつた。今にも人が飛び出してくるのではないかと、一瞬足を踏み出すのをためらってしまう。角をまがろうとするたびにその先をうかがうような仕草に、まわりはヘンなクセだと笑い、雫自身も気をつけるようになった。

夢に見た知らない街とは、ニューヨークだつた。雫の前世である

芳賀敦は、ニューヨークを訪れていた。芳賀敦をひきつけたものがニューヨークにはある。同じ魅力が今また雫を同じ土地へと導いていた。

コツコツと窓を叩く音に我に返ると、大竹いずみが雫にむかつて手をふっていた。いずみは、ニューヨーク在住のライターとして、日本の雑誌などにニューヨークの情報を提供している。ニューヨーク滞在中は、彼女のアパートに寝泊りさせてもらっている。

雫との付き合いは、雫がモデルとしてファッション雑誌に登場した時からで、もう2年にもなる。本人でさえどうなるかと不安に思っていたモデル業を、いつかは誰もが注目する人気のモデルになるというてはばからなかったのがいずみだった。彼女の予言があたった今は、雫は滅多に休みが取れず、試験を受けるからといってやっとな仕事から解放されるほどの売れっ子になっていた。

いずみは、雫が売れっ子モデルになっても新人のころと変わらない態度で接し続けてくれる、心を許せる数少ない知り合いのひとりだった。

新人のころには、ぼろ切れのような扱いをしていたくせに、売れたとたんに手の平を返したようにすりよってくる大人は多くいたが、雫は相手にしなかった。その態度は、整いすぎた顔立ちとあいまって生意気とも言われたが、雫は気にしていなかった。仕事は完璧にこなすからプライベートには一切かわってくれるな、短いキャリアで雫がまとった防護服は彼を守りもしたが、敵も多く作っていたが、いずみは、そんな態度は大人じゃいわね、と冷静に叱ってくれる誠意ある友人だった。

「待った？」

「それほどでも」

雫はいずみをハグし、頬に軽いキスを受けた。ニューヨークに移り住んで15年になるいずみは、すっかりアメリカ人だった。

「思ったより取材に時間がかかったって」

はぎとるようにコートを脱ぎ捨てると、いずみの豊満な体があわらになった。12月だというのに、キャミソールにジャケットをはおっただけ、タイトなジーンズ姿のいずみは40過ぎにはみえなかった。

「一息入れてから行く？」

「そうね、コーヒーぐらい飲ませてもらおうかな」

この日の午後、雫はいずみのショッピングに付き合う予定になっていた。要するに荷物持ちなのだが、泊めてもらっている以上、文句は言えない。いずみの仕事が入っていた午前中には、前から行ってみたいとおもっていた写真センターを訪れて時間をつぶし、約束の2時間には待ち合わせのカフェに着いていた。いずみが姿を現したのは約束の時間を15分過ぎていた。

第37話 ショーウィンドウ

いずみに案内されて向かったのはニューヨークでもっともホットだと言われる地域だった。かつては治安が悪かったその地域は近年の再開発によりめざましい発展を遂げ、歴史的な古い建物の残るなか、おしゃれなカフェやレストラン、ショップが立ち並ぶ場所に生まれ変わった。

いずみは目当ての店をみつけると、足早に中へと入って戦利品を次々と手にしていた。クリスマスとあってこの店も人でごった返している。クリスマスショッピングは戦いのよ、といずみは冗談めかして言ったが、雫には冗談に思えなかった。

「シズクは、もうプレゼントは買った？」

「いや……」

いずみの言うプレゼントとは、恋人への贈り物という意味だろう。雫は、奈津美へのみやげにオルゴールを買ったことをふと思い出した。ふらりと立ち寄ったフリーマーケットで見つけた、奈津美の好きな曲を奏でるオルゴールだった。

いずみの買い物に付き合うだけだと店内をそぞろ歩くだけだった雫だが、その視線はいつしかみやげものになりそうな小物の上を泳いでいた。

「シズクもプレゼント買う？ みつくるってあげるわよ」

品定めをしているかのような雫の態度に、いずみが目ざとく気付いた。

「いや、プレゼントっていうか、みやげものを買おうかと」

マネージャーの沢井に頼まれたものならすでに買ってた。事務所へのみやげも、沢井に言われたものを買ってある。沢井に頼まれてやっとみやげを買うつくらいの気遣いしかできない雫が、俊へのみやげを考えていた。

「そうなの？ それならねえ、いいお店を知ってるの！」

と言うなり、自分の買い物をさっさと済ませ、いずみは足早に店の外へと出た。

「この先にシルバーアクセサリーのお店があるの。日本人にはまだ知られてないから、おみやげにはぴったりよ。デザインがおもしろくて、ニユー Yorker たちに大人気なの」

その“店”は店ではなかった。品物を並べているのだから店には違いないが、天井は突き抜ける空、そぞろ歩く店内はストリートそのものという、路面店だった。

テーブルの上に広げられた黒いベロアの布地の上に、シルバーのアクセサリーが乱雑に並べられている。金属質な光を放ちながらも滑らかなラインのデザインは、まるで生きているかのようで、息をひそめてじっと人が立ち去るのを待っている。少しでも目を離してしまえば、たちまち姿を変えてしまうのではないか、そんな気がして雫はまばたきを忘れて見入っていた。

「何がいいかな。ペンダントトップもいいし、指輪は…ちょっと意味深かなあ？ ピアスはどう？ そのコ、ピアスの穴は開けてる？」

アクセサリーのデザインはユニセックスむけで、男性女性どちらでも身につけておかしくはないだろうが、どちらかというと、かわいらしいデザインの女性ものばかりを、いずみは物色している。どうやら雫がみやげをわたす相手は雫のガールフレンドと勘違いしているようだ。キューピットのつもりではりきってあれこれと手にするいずみがあまりにも楽しそうなので、雫は誤解を解くチャンスを逸してしまっていた。

「なあ、女っぽいけど、ヤツは男なんだ」
「彼女じゃないの？」

そういつた時のいずみの顔を、雫は忘れられない。その後も、会うたびにいずみの幸せな誤解は笑い話となった。

いずみは丸い目をさらに丸くし、真っ赤なルージューをひいた大きな口をさらに大きくして、息をしていなかった。「死ぬんじゃないかと思ったんだから」と、後になってから告白され、この時のいずみの衝撃は会う度の笑い話となった。

店を後にし、歩きながらもふたりは思い切り笑い転げた。雫の照れた様子から、いずみは勝手に恋人にあげるプレゼントだと思い込んでいたのだ。恋人ではないかもしれないが、プレゼントをしようと思い立ったからには特別な存在の人なのだろうと。恋人でも何でもなく、ただのルームメイトだと知ると、やっと学院での友だちができたわね、と、いずみは喜んだ。

友だちと言えるかどうか、雫は後について何も知らない。映画研究会の映画に出演したことは学院の噂で知っていたが、どんな映画を観て、どんな音楽を聴いて、どんな本を読んでいるのか――知

っているのは、人なつつこい笑顔ぐらいだ。

みやげを渡すような親しい仲でもない。愛しい人たちへの贈り物を探すいずみや、クリスマスに浮かれる街の空気に影響されて何か渡したくなっただけなのかもしれない。

「みやげはあげないかもしれない」と言おうとしたその瞬間、雫はある店の前で足をとめた。曲がり角にあるその小さな店のショーウィンドウには女物の洋服が飾られている。雫はウィンドウ越しに店内をじっとみていたかと思うと、足早に店に入ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559w/>

プラトニック・ラブ

2011年12月8日08時45分発行